

明日をひらく地域活性化のための情報誌

地域づくり

2012

6

ISSN 1340-8917



特集 ■ ICT にシニアパワーを！

本誌は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです



特集

ICT にシニアパワーを！

- | | | |
|----|--------------------------------|----------------------------------|
| 4 | ICT でつながる、深まる地域の絆 | 近藤則子(総務省地域情報化アドバイザー、老テク研究会 事務局長) |
| 8 | 岩手県大船渡市 シニアの力を被災地で役立てたい | 及川 純 |
| 10 | 千葉県我孫子市 パソコンの訪問指導から犬の散歩まで | 佐々木敏夫 |
| 12 | 東京都世田谷区 井戸端会議ならぬ「パソコン会議」 | 大川加世子 |
| 14 | 長野県松本市 PC を通じ人との出会い交流を深める | 大月一夫 |
| 16 | 富山県高岡市 地域に根差した高齢者支援をめざして | 小松裕子 |
| 18 | 京都府京都市 脳を活性化するミニコミ誌講座と iPad 講座 | 馬場次代 |
| 20 | 大阪府 携帯電話からはじまる安心・安全なまちづくり | 寺田美哉子 |
| 22 | 和歌山県 元気な高齢者が集うデイサービスの場 | 千品雅彦 |
| 24 | 島根県浜田市 シニアが笑顔で集う ICT サロン | 長尾康一 |
| 26 | 佐賀県基山町 地域貢献と仲間づくりを目標に | 久野美津代 |
| 28 | 沖縄県 「常に楽しく」を活動の基本理念に | 砂川正男 |
| 30 | メロウ倶楽部 車椅子利用者でも会員ライフを満喫 | 若宮正子 |

レギュラーレポート

- | | | | |
|----|--|----|---|
| 32 | 観光を通じた東北の復興と地域振興にむけて
小林弘典(観光庁観光地域振興部観光地域振興課東北観光推進室) | 44 | ふるさと情報コーナー
市区町村パンフレット ベスト 30 出揃う！(地域づくり情報課) |
| 34 | 地域トピックス
街コンで地域も若者も元気に
穴沢秀朗 | 46 | 首長の思い
「ばらを活かしたまちづくり」による「元気なかのや」を目指して
鹿屋市長(嶋田芳博) |
| 36 | ～北から南から～
埼玉県さいたま市
大宮盆栽村の歴史と盆栽文化の発信
田口文哉 | 48 | センター通信 |
| 38 | 福岡県北九州市
世界の環境首都を目指した取組
伊藤正志 | | |
| 40 | 移住・交流推進支援事業(山梨県身延町)
「新たな住まい手」と「地域」のマッチング
佐藤彰啓 | | |
| 42 | 地域づくり団体探訪
天の川実行委員会
歴史的景観とシニア住民のもてなし力を活かした地域活性化
奈良県高取町 | | |

グラビア

2 ICT にシニアパワーを！

47 手前みそですが… 【青森県五所川原市】



とうきょうスカイツリー駅前

平成24年5月22日、墨田区押上に世界一の高さ634mを誇るタワー・東京スカイツリーが開業した。下町の新たなランドマークの誕生だ。

関東一円を見渡すことができる2つの展望台、隣接する商業・観光施設でのショッピングや食事などで集客が期待される。3月には、最寄り駅の1つである東武伊勢崎線(現・東武スカイツリーライン)「業平橋駅」が「とうきょうスカイツリー駅」に改名され、来訪者の迎え入れも整えている。

東京スカイツリー効果は、地元墨田区だけでなく、周辺地域の台東区上野、浅草など下町全体にも影響を与え、すでに開業前から賑わいをみせている。タワーを望みながら江戸情緒溢れる下町の散策、隅田川下りなどを楽しむ人も増加中だ。

平安初期、この地で三十六歌仙の歌人のひとり在原業平が、言問橋の由来ともなった「名にしおはばいざ言問はむ都鳥わが思ふひとはありやなしや」とを詠んでいる。

千年以上の時を経て、この地では伝統と先端が融合する新しい魅力が堪能できる。

(写真・文 畠田千鶴)

東京スカイツリー®
表紙

世界農業遺産を活用した地域づくり ～「能登の里山里海」を未来へ～

石川県知事 ● 谷本正憲



昨年6月、国連食糧農業機関（FAO）によって、「能登の里山里海」が我が国で初めて、先進国でも初めて「世界農業遺産」に認定されました。

「世界農業遺産」とは、その土地の環境を活かした伝統的農法や文化、風習、景観、そして、生物多様性にも富んだ、世界的に重要な地域を次世代に継承するために、2002年（平成14年）にFAOが創設した制度です。

「能登の里山里海」は、自然と共生した農林水産業の営みや長い歴史の中で育まれた文化・祭礼、優れた里山景観など、地域に根ざした多様な里山里海が集約された地域であり、その総合力が世界的に高く評価されて、この「世界農業遺産」に認定されました。

「世界農業遺産」は、いわゆる展示保存型の遺産ではなく、社会・経済状況などが変化する中で、「現在進行形」で営まれている地域の暮らしそのものが評価されるものであり、その認定を維持するには、農林水産業をはじめとする地域の営みを、単に維持するという範疇を越え、新たな付加価値をつけることによって活性化させ、時代に応じた持続可能なシステムへと発展させることが重要です。

「能登の里山里海」についても、過疎高齢化が進展する能登地域において守り、次世代へ引き継いでいくためには、農林水産業をはじめとした地域の営みを今後も適切に維持・保全することはもちろんのこと、能登ならではの様々な地域資源を最大限活用した新たな生業（なりわい）を創出する必要があります。

具体的には、農業の担い手の育成や、農業基盤整備の促進、耕作放棄地の解消などの施策を進めるとともに、「日本初・先進国初の世界農業遺産」というブランド力

を活用した「農林水産物の高付加価値化」や「里山エコツーリズム」など、地域資源を活用した「新たな生業の創出」を通して、地域に暮らす人々の営みを確保し、元氣な里山里海づくりを実現していかなければなりません。

このため、本県では、これまで、能登の食材を能登の器で提供する能登井の開発や、奥能登の特色ある農産物を消費地金沢へ安定的に供給する奥能登直行便などに取り組みとともに、地元金融機関の協力を得て、総額約53億円の「いしかわ里山創成ファンド」を昨年度に創設し、民間が取り組む里山の資源を活用した生業の創出などを支援しています。そして、昨年度に応募があった41件のうち、実に8割にあたる32件が、能登地区からの応募であり、「世界農業遺産」の認定を契機に、新たな事業活動に取り組みもうとする能登の人々の意気込みを改めて感じたところです。

さらに、今年度は、世界農業遺産の更なる価値の向上に向けた利活用や保全の仕組みづくりのための本格的な事業展開を図ることにしており、奥能登地域のJAと連携した棚田米のブランド化や、農薬・化学肥料を低減したエコ農業の推進、情報端末を活用しながらブラグイン・ハイブリッドカーで能登の里山里海をドライブするプロジェクトの実施、奥能登の休耕田でのドジョウ養殖の実証試験などの取り組みを進めることにしています。

本県では、今後とも、こうした世界農業遺産の認定をテコとした取組を通じて、元氣な里山里海づくりを実践し、能登地域、ひいては県全体の活性化に繋げていきたいと考えています。

ICTにシニアパワーを！



地域づくり PC 講習会
● 千葉県我孫子市 (p10-11)



仮設住宅でパソコンでお手伝い
● 岩手県大船渡市 (p8-9)



春と秋には日帰りの親睦バス旅行も
● 長野県松本市 (p14-15)



アイパッドを持って人力車で下町散歩
● 東京都世田谷区 (p12-13)



オリジナルミニコミ誌が完成しました！
● 京都府京都市 (p18-19)



PC クラブ：いつも満員。顔をあわせる楽しさ
● 富山県高岡市 (p16-17)



サロンの様子

● 和歌山県 (p22-23)



パソコン講座の様子

● 大阪府 (p20-21)



23 年度新年会

● 佐賀県基山町 (p26-27)



園児が見る電子上電子紙芝居

● 島根県浜田市 (p24-25)



地域の人達にパソコンの楽しさを教えている

● メロウ倶楽部 (p30-31)



インターネット講座

● 沖縄県 (p28-29)

ICTにシニアパワーを！

ICTでつながる、深まる地域の絆 パソコンの活用で高齢者は人生を取り戻せる――

総務省地域情報化アドバイザー、老テク研究会 事務局長 ● 近藤則子

世界一の長寿国となった日本。65歳以上の人口は2958万人（平成22年10月現在）を超え、「シニア世代」の動向が社会の注目を集めている。定年後、ICT（情報通信技術）を活用して地域社会に貢献したい、と考えるシニアの皆さんを中心に、日本各地で「シニアネット」活動が展開されている。

米国で始まった「シニアネット」

「シニアネット」は、米国の非営利団体で、1986年に活動を開始し、シニア（米国では55歳以上）のインターネットやパソコン学習を支援している。創設者のメリー・ファローング博士の「パソコンは心の自転車」（自分の心、気持ちを相手に簡単に伝えることができる機械）という言葉は多くの人たちの共感を集めた。

「介護が必要になっても社会に参加できる」手

段として、シニアもパソコンを積極的に活用しようと、ネット上にシニアが集う電子会議室と、シニアがシニアにボランティアでパソコンを教えるPC学習センターを米国だけではなくアジア、北欧にも開設していた。現在はPC学習センターだけではなく、センターのない地域の人も、パソコンだけではなく語学など教養講座をネットで学べるようにシニア向けのオンライン学習教材のネット販売やPC利用支援を行っている。

米国ではソーシャルメディアが大人気で、シニアのインターネット利用は急増しているという。ネット利用者の47%が50歳から64歳で、65歳以上が26%という調査報告（*）もある。今週のシニアネット公式ブログのテーマもズバリ、「フェイブックで友達を探す方法」だ。

*米国SeniorNetより <http://www.senior.net.org/>

老テク研究会は1995年、シニアネットの代

表として当時、1千名を超える会員数を誇る全米最大のシニアネット学習センター、ジョージア州サバナ市のコーディネーター、ルース・ギャレット博士の講演会を開催した。

ファローング博士は、シニアネットには「リーダー（指導者）ではなく、コーディネーター（調整役）が要」という方針で、年1回の全国大会には全米からコーディネーターが招待され、研修会や親睦イベントが開催されていた。私はセントルイスの第10回大会に参加したが、全米から500人以上のシニアが集まり、有力な政治家や有名人が大ホールでシニアたちに応援のスピーチを贈る盛大なイベントであった。

ギャレット博士は「55歳からの暮らしと心を支えるサイバースペース（電脳空間）」という講演の中で「定年（Retirement）は再点火（Refirement）のチャンスであり、その点火ボタンはパソコンであると断言。パソコンを活用で

きるようになれば、高齢者は定年で一度は失った仕事や人間関係、つまり、あなたの人生を取り戻すことができる」と語り、大きく紹介された。

「自分もシニアネットに参加したい。パソコンの勉強がしたい」―。記事を読んだ大勢の人たちからの問い合わせが老テック研究会に寄せられた。本稿では、17年間ボランティアとしてシニアネットの活動に関わってきた立場から、米国や韓国、日本のシニアネットの事例を紹介したい。

シニアネットが地域にもたらす宝とは

米国のシニアネットの使命は「高齢者がコンピュータを使えるように支援し、シニアの可能性を掘げ、彼（女）らの知恵や知識を情報社会で分かち合えるようにすること」である。

サバナ市のシニアネット学習センターの講師、キャサリンさんは当時72歳、元小学校の教師で、ひとり暮らしだった。ずっと独身だったので子供もない。シニアネットに参加するまではとても孤独だったという。

シニアネットの講座を受講し、パソコンが大好きになった。すぐにボランティアとして参加し、キャサリンさんは、大人気の講師になった。さすが元教師である。持病のリウマチが悪化して、外出が困難になると、初心者むけの教材を作成してネットで公開した。

これがわかりやすいと評判になり、各地から講師たちが家にやってきた。サバナ市の歴史を紹介した本を出版し、市長から表彰された時には、教え子たちが自宅に集まって祝ってくれた。自宅を



ギャレット博士（マハーレーイ大学ホームページより）

で仲間たちと楽しく過ごしたという。

彼女の老後はシニアネットのおかげで、大きく変わったのだ。それまでの孤独な暮らしが、「シニアネット」という学びの場を通じて地域の友人たちと出会い、パソコンを活用することでその絆を最後まで失うことがなかったのだ。

「シニアにパソコンを教えるのは、本当に楽しい、やりがいのある、重要な仕事です。無限の可能性があります。世界一の高齢社会の日本にシニアネットは最高の処方箋です」

ギャレット博士（77）は、米国の老年学教授として現役で、今もずっと変わらずに、私たちを応援し続けてくれている。

★ギャレット博士の講演記録「高齢者こそ高度情報社会の主役」 仙台市インパクトアークライブ「仙台学舎」デジタル文庫

<http://prj.smt.jp/~gakusya/2001/dejibunko/list2.html#roteku>

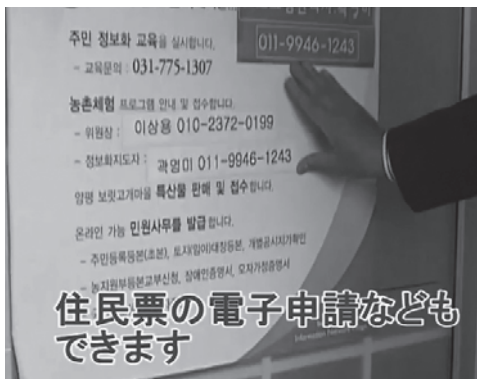
韓国から学んだ行政との連携

日本では通産省（当時）が支援する「メロウフォーラム」というパソコン通信上のシニアネットがあることを知り、横浜市中村克己さん（78歳・当時）にお目にかかることができた。

サロンとして開放し、地域の人たちのパソコン教室にしたキャサリンさんは、亡くなる直前ま

元商社マンの中村さんは英語が堪能で、中村さんが「線友」とよぶ米国のシニアネット創設以来の会員であるドロシー・ミラーさんや、韓国のキム・ダエス博士たちと楽しく交流しておられた。中村さんから韓国のシニアネットである「元老坊」の幹部、ユー・キョンヒ氏を紹介していただき、お話を聞きたいと思い、初めてソウルを訪問したのは1996年の春だった。ユー氏（60歳・当時）は、原子力の研究者でコンピュータに詳しい元韓国政府高官だ。京都で生まれ、日本語も堪能だった。

「情報革命は高齢者の生活を必ず豊かにします。しかし、韓国では、市民団体だけで高齢者向けに新しいことを始めるのは難しい。政府や大企業と連携して、郵便局や電話局を会場にした高齢者向けの無料講習会を展開するべく韓国高齢者情報化教育協議会をまもなく設立します」と、幹部の方を紹介してく



れた。驚いたことに、日本でいえば元郵政大臣、元郵政省事務次官、元電電公社総裁といった人たちの集まりであった。

「韓国は年配者を大切にしてくれるありがたい伝統がありますが、敬して遠ざけているともいえます。現役時代に社会的な地位が高かった人ほど、引退後は友達が少なく孤独です。地域や家庭でも大切にしてくれるけれど、親しく交流してくれる人はあまりいません。ここでは元大臣も、貧しい人もいっしょにお年寄りのためにパソコンボランティアをします。活動の後にみんなでいっしょに飲むお茶は、これまでの人生で一番おいしいお茶だと喜んでくれます。私の夢は情報通信で日韓が理解し合える交流の場をつくることです。サイバースペースに国境はありません」

ユー氏は、韓国の元郵政省事務次官チョン・キョソク氏と共に来日、「日韓のシニアネットワークコミュニティをつくろう」と呼び掛け、中村さんは「やりましょう」と約束してくれた。



情報化村の副委員長 オー・サンホ氏 (74)

韓国高齢者情報化教育協議会に所属する、日本語を話す高齢者の会「KJ-Club」とメロウフォーラムから生まれた中村さんが所属する「メロウ倶楽部」との日韓シニアネットの交流

は、今年で12年目を迎え、5月24日には佐賀市で「日韓シニアネットフォーラムin佐賀」が開催される。毎週土曜日の夜には、パソコンに向かって日韓のシニアたちが複数同時通話会議システムを使って会話を楽しんでいる。

「今日は近くの公園で桜の花見をしたので写真を送ります」と、写真を全員に送信すると「きれいな桜並木ですね。韓国の桜もすばらしいですよ」と韓国からの声が届くのだ。

韓国の高齢者情報政策「情報化村」

韓国は世界一の電子政府を持つ国である。住民登録から選挙、納税まで5千500の行政サービスはすべてオンラインで利用できる。「情報化から高齢者が取り残されないよう」支援するためにパソコンの無料配布や無料講習会を、まさに国をあげて実施し、現在も継続しているが、その中でも特に成果をあげた政策が「情報化村」である。

住民にパソコンをくばり、村の中心にパソコン教室を設置する。このパソコン教室は学校であり、住民が集まる交流サロンであると同時に電子行政サービスを利用できる窓口であり、地域のネットワークビジネスの拠点だ。村にマンツーマンで使い方を訪問指導してくれる若い講師に3年間常駐してもらい、日本の「楽天」のような、電子商取引サイトに村の農産物や観光情報を発信するホームページを作成する高額な費用を公費で支援している。ソウル市郊外のポリコゲ村は平均年齢70歳の過疎の村であった。以前は訪問する人は年に100人ほどだったという。それが情報化村になり、訪

問者は1万人に急増した。農産物のネット販売や観光収入で村民の収入は4倍になり、村に若者が戻ってきたという。

パソコン教室の端末にはカメラがついていて、ソウルの孫の顔をみながら無料通話ができるのでお年寄りには好評だそう。

オー・サンホ氏(74)が、パソコンに初めてさわったのは68歳の時。パソコン学習は難しくはなかったかと尋ねると、「難しくはなかった。村民へ支払う報酬の計算にパソコンは便利だ」と村の活性化に大いに貢献した政策を高く評価していた。

オー・サンホ氏へのインタビュー動画

<http://www.youtube.com/watch?v=F6P4rpq>

OKKQ&feature=relmfu

『これから(超高齢社会)の電子政府・電子自治体を考えるシンポジウム』より

★先行する韓国の行政改革・日本が目指す国民本位の電子行政—シンポジウムの記録

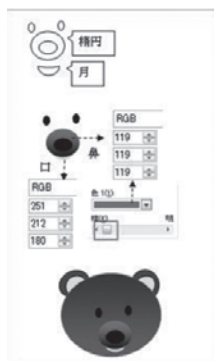
<http://www.mellow-club.org/e-govsympo/>

シニアが創る新しいパソコン文化の時代

日本各地のシニアネットでは「デジカメを持つて小さな旅」が人気である。これまでの親睦旅行と違うのは「参加者への連絡はメール」なので幹事の負担は少なくなった。「旅の思い出はネットで共有」できるので便利になった。動画の編集もパソコンで行い、動画投稿サイトは無料で利用できる時代になり、誰もが「紀行番組」の演出家である。シニアネットは新しい「観光振興」のメディア

アとしてビジネスになりつつある。パソコンで「芸術」の楽しみを発見したシニアも多い。よみうりオンラインの「ワードで大人のお絵かき」の作者、高倉幸江さん(65)は、若い頃には絵を描いたことはないそうだ。

老人ホームでパソコンボランティアをした時に、文字より絵を描くほうが高齢者には楽しんでもらえた、という経験からワープロソフトの図形を使う「シェイプアート」の描き方を開発し、シニアのパソコン仲間で大人気になった。今では全



顔のパーツを描く
(1)目:「基本図形」→「楕円」を描きます。
「塗りつぶし」→「黒」
コピーして2つ描きます。
(2)鼻:「基本図形」→「楕円」を描きます。
「塗りつぶし」→「塗りつぶし効果」→
「グラデーション」→1色→「その他の色」
「ユーザー設定」→「RGB」の色
「種類」→「横」、「バリエーション」→「左上」
「線の色」→「なし」
(3)鼻先:「基本図形」→「楕円」を描きます。
「塗りつぶし」→「黒」
(4)口:「基本図形」→「月」を描きます。
変形して横向きに回転します。
「塗りつぶし」→「その他の色」→「ユーザー設定」
「RGB」の色
(5)顔をまとめます。



高倉幸江さんの作品(出典:よみうりオンラインより)



初音ミクのいろは歌

音楽をパソコンで楽しむシニアも多い。つい先日民放のテレビで「78歳が初音ミクに挑戦!」が大きな話題になった。

初音ミクで「いろは歌」を作品にしたメロウ倶楽部のとんぼさんこと深谷幸夫さん(78)は老人ホームに住んでいる。取材した若い人たちは高齢者がITの高度な知識が必要な初音ミクに取り組んだことだけではなく、「老人ホームでパソコン?」と驚いた。

老人ホームというと、病弱な老人の住まいというイメージが強いが、入居している人に聞くと「賄いつきの長屋」だという。外泊も外出も自由。そもそも病気や障害の重い人は入居できない。将来は老人ホームの食事とパソコン教室の講師が施設の人気を左右しそうである。

初音ミクのいろは歌

<http://www.mellow-club.org/hikaru/top-e-kaiin/kaiin.html#tonbo>

国のパソコン教室でも実践されている。

「シニアはもちろん、中学生や障害のある子供を育てているお母さんなど、若い人に喜んでいただけてうれしい」と高倉さんは、障害のある子供の作品ギャラリーを個人のサイトから応援している。

出典 よみうりオンライン
「ワードで大人のお絵かき」

<http://www.yoniuri.co.jp/otona/study/drawing/>

スマホやタブレット端末が変えるシニアネット

2011年に登場して、世界中で爆発的な人気のタブレット型パソコン「iPad」は、「画面の文字が簡単に拡大できる!」とシニアに好評である。これでホームページはみやすくなった。パソコンのような電話、スマートフォンもこれからシニア世代に広がっていくだろう。

テレビや雑誌をみながらスマホを使って双方向の情報サービスを利用する「マルチスクリーンサービス」は、マスメディアから発信される情報によって異なる地域や世代の人たちがつながることのできる新たなサービスとして地域を活性化していくに違いない。

ITスキルを獲得したシニアが活躍するもう一つの世界「サイバースペース」に、誰もが参加できる時代は、すぐそこまできている。



シニアSOHO普及サロン・三鷹iPad研究会による体験会より(写真提供 電経新聞)

ICTにシニアパワーを！

1

岩手県大船渡市

シニアの力を被災地で役立てたい ―震災から再出発、地元での奉仕活動中心に展開―



シニアネット・リアス大船渡代表 ● 及川 純

「パソコンも何もかも失ってしまった。こうした講習を受けられるのは助かる。」「何とかパソコン操作を覚え、仕事探しに役立てたい」。職を失った被災者の求職活動は悲痛だ。特に50代、60代の中高年層にとってはなおさら。求人条件に「多少ワード、エクセルのできる方」との条件が加わっている。

PC講習会に定員の2〜3倍の応募者

今年1月、パソコン講習会の受講者を募集したところ、定員15名に対して2、3倍もの応募者があった。2月に、入門講座（昼間）、初心者講座（夜間）の2コース。そして4月からは、さらに2回目の夜間講習を開催した。シニアネットの社会貢献の一環としての取り組みである。

シニアネット・リアス大船渡の発足は10年前の平成14年1月だった。隣接している陸前高田市、釜石市にある2つのシニアのパソコン仲間に触発された。ちょうど国が、パソコンの普及に乗り出

したところである。

大船渡市の三陸公民館にある視聴覚室のパソコンを利用してのスタートである。会の目的は、シニアでも時代に遅れないようにパソコンの操作を覚える。学んだ技術に、シニアの豊富な体験を生かして、社会奉仕に役立てる。活力増進と生きがいを醸成する―などである。

対象は、男性はリタイヤした60歳代、女性は50歳代以上。会員の中に、現役時代、パソコンを本格的に習った者はほとんどいない。講師役は、多少知っている者、興味ある者がする。学習は「教え・教えられる」をモットーにしている。

発足当時、20名が集まった。月、火曜日、公民館備え付けの20台のデスクトップに熱中した。6ヵ月後、会員は60名に膨らんだ。パソコン願望が高いことに気を良くした。上手に出来上がった文書に歓声を上げたのは、今となつては一昔前のことである。

ただ教室での学習が主で、目指そうとする社会奉仕活動は少ない。大船渡病院委託のメッセージ



申し込みが殺到したパソコン講習会

カード作成（こどもの日、七夕祭りなど、節目の行事食に添えるカード、年7回）、福祉団体主催のフェスティバルや、教室を借用している三陸公民館の文化祭などの行事に、作品の出版、手作りカレンダー、アイロンプリントなどで参加した。

シニアを悩ませるのは、目まぐるしく変わるパソコンのソフト（OS）だ。その対応に四苦八苦する。数年前からパソコン持参の学習態勢を取っているので、23年度からソフト別の学習を取り入れることにした。

活動拠点の三陸公民館が 壊滅的な被害を受ける

その矢先に起きたのが、昨年3月11日の東日本大震災だった。活動の本拠地である三陸公民館が



壊滅状態の三陸公民館



桜撮影会。桜並木の後方は被災地



大船渡教室の外観

現在の会員は70数名。「教え、教えられる」「分かるまで何度も」「あわてず、ゆっくり」と、「シニアの力を社会に役立てよう」との意気込みで、大震災を機に大きく転換しようとしている。

壊滅的な被害を受けた。

再開はとても無理かな？と今後の方針を決めあぐねていた昨年6月、経済産業省の外郭団体である財団法人「ニューメディア開発協会」が、パソコン20台を貸与してくれることになった。

これを契機に、再開する動きが高まった。幸い数年前から借用している大船渡教室が難を免れた。

安否確認したところ、会員115名うち100名から返事があった。1名死亡、19名が家屋流失・全半壊。再開を望むもの70名。7月末の定期総会で、「10月より再開」と決定した。

そして昨年10月4日、会員60数名で再出発した。火曜、水曜日の各午前、午後、4クラスを編成。貸与されたパソコンと会員持ち込みのパソコンで学習が始まったが、今回の再出発は、従来の活動

と一味もふた味も違った。

「パソコン操作を習うだけでいいよ」といった、自己満足型学習から、社会に貢献する本来の目的の姿勢に、方向が転換した。被災地の我々にパソコンを援助してくれる人がいる。それに応えねばならない、という雰囲気背中を押した。

学習再開と並行して、「パソコンでお手伝い」事業に着手した。年賀状作りとカレンダー作り、インターネットによる検索を、11、12月に、仮住宅10カ所を回って実施した。

今年に入って、冒頭に記した被災者の高齢者対象の「パソコン講習会」。これには、ニューメディア開発協会から、講師料の補助があった。

復興した街のマップづくり、観光関連の資料作成も

3月末、平成24年度の定期総会を開いた。被災者に対する支援、復興する街づくりのための事業を盛り込んだ。具体的には、パソコン講習、復興した街のマップづくり、観光関連の資料作成などである。いずれも震災前には、会全体で取り組むのは難しい、と思われた事業である。

4月9日には、24年度がスタート。最初は昨年度から実施している「パソコン講習会」。夜7時になると、受講生が集まる。みんな休むことなく10時まで熱心に講義を受けている。もちろん講師・助手は我々が受け持つ。被災者に役立っているとの実感が沸いてくる。

会員対象のデジカメ講座も始まった。全員が一人も漏らさずデジカメを扱えるようにというのが狙いだ。大船渡の復興状況を、皆で発信できるようにと、ホームページの勉強会も始めた。

パソコンの訪問指導から犬の散歩まで



NPO法人あびこ・シニア・ライフ・ネット
(略称 アシラネ) 理事長

● 佐々木敏夫

1 パソコンの訪問指導から出発

NPO法人あびこ・シニア・ライフ・ネット（以下、「アシラネ」という略称を使用する）は、本年10周年を迎える。平成14年5月にパソコン好きの仲間数人で、主に中高年者を対象としたパソコンの訪問指導をしようということで、アシラネという団体を立ち上げたのが始まりである。アシラネは、会員制とし、会員が会員を助けるという互助組織とした。会員は現在550名ほどで、我孫子市では最大のNPOである。

活動の拠点である我孫子市は、上野から常磐線で30数分と都心から近く、北側には利根川がゆったりと流れており、南側には手賀沼があり、人口13万強の比較的小じんまりとした市である。多くの文豪たちが北の鎌倉といって愛した街でもある。

平成14年当時市内にもパソコン教室もあったが、私たちは敢えて訪問指導を中心に据えて活動

を開始した。パソコン教室で大勢と一緒に学ぶことが不得手な人、教室にはレベルの高い人、低い人などが一緒に学び、インストラクターが受講生の個別性に配慮しないため、ついていけない人からの苦情を聞いていたからである。

指導に当たって留意した点は、上からの目線で教えるという態度をとらない、ということだった。この方針は、現在教室（常設）のパソコン講座でも貫いており、今後変えるつもりはない。このことが次項の便利屋事業で触れるが、アシラネが、利用者から信頼され、いろいろなことを頼まれるようになった原点でもあり、高齢者、障害者等の買い物等外出支援事業に繋がったといえる。

中高年者は、パソコンを習ってもすぐに忘れてしまふ、しかし、同じことを聞くのはプライドが許さない、そのため、結局パソコンから遠ざかってしまふ。私たちは、パソコンを教えながら、「忘れるのも同じ」「同じことを何回も人に聞くのはいや」という気持ちは、私たちも全く同じだということを話し、パソコンを弄るのが楽しくなるよ

うに仕向けた。

訪問指導での会話の中で、「実は家の蛍光灯を取り換えられない」とか、「庭木が大きくなりすぎて困っている」などの相談を受けるようになった。会員の中には剪定が好きな人、日曜大工が好きな人など、いろいろな人がいる。パソコンを教えに行き、いろいろなことを頼まれたら専門家の会員に回すというルールがいつの間にかできた。噂を聞いて直接私のところに電話をかけてくる人



地域づくりPC訪問サポート



地域づくり買い物支援



ペット散歩

もいる。会員の中に専門学校のパソコン教室で、CADで設計図面の作成を教えている人がおり、CADの講座を開設することにしたところ、受講生が予想以上に集まった。受講したものの中にはCADのスキルを買われて工事会社に就職した者もいる。

2 便利屋事業がいろいろな形に発展

アシラネはボランティア団体だが、有償ボランティアと位置づけている。ある程度の報酬を貰わないと長続きしないというのが私の信念である。アシラネは、パソコンの訪問指導、便利屋事業な

ど会員である利用者から1時間千円を貰うことにしている。

利用者にとってみれば、会員になって利用料を支払うことによって、頼み易いというメリットがあり、頼まれるほうから見ると、好きなことをしてわずかではあるが謝礼を貰えるのは楽しい。

高齢者で犬を飼い、家族のような存在になっているのだが、病気になるってしまった、急用で遠い田舎に泊まりがけで行かなければならない、何とか犬の面倒を見て貰えないだろうか、といった相談も受けるようになった。平成23年度には買い物と一緒に行ってほしいとの要望が多くなり、買い物支援グループを組織し、買い物支援を組織とし

てすることにした。買い物を手伝っているうちに、市役所に一緒に行ってくれないか、病院に一緒に来てほしい、手賀沼公園に連れて行ってほしいなど外出支援も頼まれる人も出てきた。

高齢になって、或いは夫を亡くし、買い物や外出したくても一人では行けない。しかし、気心が知れたアシラネの会員であれば、お喋りをしながら買い物をしたり、外出ができるので楽しい雰囲気になれる、といって喜ばれている。

3 会員相互の絆を強めるための会報等

アシラネは、パソコン教室、小学校のパソコンクラブの指導、便利屋事業などで会員が増え続けているが、会員同士の繋がりを強めるために設立の翌年（平成15年5月）「アシラネ」（年4回発行）という会報を発行し、会員に届けるようにした。昨年「アシラネ」と同時発行で会員のエッセー、俳句、川柳などを載せる「アシラネ文芸」を発行し、会員に喜ばれている。これらは会員が会員宅に直接届けることにしているので、会員相互の繋がりが深まっている。

パソコンの訪問指導という簡単にできることから始めた事業であるが、高齢者、障害者等のために、更なるいろいろな支援をしていこうと考え、5月に「アシラネ10周年祭」を開催した。

井戸端会議ならぬパソコン端会議

— iPad片手に爺婆でスカイツリー見物も —



「コンピューターおばあちゃんの会」代表

● 大川加世子

思い起こせば今から16年前。「おばあちゃんがするわけないでしょ！」と、散々な言われ様をものともせずパソコンを始めたのが、ついこの間のような気がしていたのに、よく頑張ったものです。ご立派な爺婆ちゃんたち！

皆さまご記憶ですか。50年を超すNHKの長寿番組「みんなのうた」の中に、今から30年ほど前に流れたアニメの題名「コンピューターおばあちゃん」というのがありました。

明治生まれの白髪頭をきりつと後ろに束ね、最新のコピーライターを叩きまくるという、時代を先取りした漫画「意地悪ばあさん」のような格好のいいおばあちゃんがいきました。多分、大勢の方がこの唄をご記憶ではありませんか？

PCが高齢者の〴〵助けマンになる時代が来ると確信

すっかりその魅力のとりこになり、「絶対これを実現させよう」と心に決めました。そして、それから15年後、「コンピューターおばあちゃん

会」を立ち上げたのです。

パソコンは会社のもの。仕事で使うもの。誰もがそう考えていた時、まさに高齢化社会の真ん中の年齢に位置していた私は、「パソコンにはもう一つの大切な役割がある。高齢者たちが孤立しないで仲間意識の絆を強め、元気に生きて行くための〴〵おたすけマン」にパソコンがなる時代が必ず来る」と思っておりまして。

とはいえ、70歳、80歳、90歳以上の、初めてパソコンを見る高齢者たちに何をどこから、どのようにに馴染んでもらったらいのか。世の中で初めてのことをするのです。マニュアルがあるわけなし、聞く人がいるわけなし…。

ちようど発会と決めた日は、朝から雨がざんざんと降っている。その中を傘をさし、杖をつき、集まって下さった80歳以上のおばあちゃんたちに、私は聞きました。「貴女はパソコンで何をなさりたいですか？」

「私、もう足が弱り、昔旅行したところをもう一度訪ねてみたい」「私、生れた村にもう30年も

帰っていません、あの村今はどうなっているのか知りたい」「世界中の美術館を見て回りたい」「私の株、今日は上がったかしら」「ブラジルに赴任中の娘が孫を産みました。孫の顔を見たい、声を聞きたい」…

写真付きメール交流が〴〵元気の素
桜前線も紅葉前線もPCで堪能

見事に、皆が違うことをしたがついていました。これらがヒントとなり、「そうだ、誰でもやりたいことから入って行こう。まずはパソコンで楽しく遊ぼう！」と考え、これを〴〵コロッケ勉強法と名付けました。

まず美味しい物を食べさせてしまおう。「わぁ美味い！これってどうやって作ったの？」と聞かれたら、「これはね、ジャガイモの皮を剥いていてね」と始まればいい。基礎も理論も後回し、



笑顔がこぼれるサロン風景

先ずは楽しむのが一番先、これしかない。

それから婆の大好きなお喋り、会話は酸素、栄養素。井戸端会議ならぬパソコン会議、だれでも朝起きたらパジャマのまま先ずパソコンの電源にかじりつく。一晩中溜ったメールが飛び込んでくる。独り暮らしの孤独感の中をさわさわと人っ気が漂う。

あつという間にライフラインになっていった写真付きのメール交流は元気の素。そうそう、2月ごろ北海道から流水着岸の写真付きのメールが入ると同じ日に、沖縄からは桜満開 もう春！ おう日本は長いよねえ…。

日本列島を南から北へ、2カ月ほどかけて桜前線が駆けのぼる。日本中の爺婆は満開の桜を堪能する。同じく秋は、2カ月かけて北からの鮮やかな紅葉前線の南下に目を見張る。こんな刺激的な日々が来ようとはだれが想像できたでしょう。

夫人の世話をする高齢男性に 「頑張ってね」の励ましメール

それだけではありません、歳をとるということはそれだけ色々な問題を抱え込みます。

90歳を超す男性から「僕の家内はアルツハイマーです。僕が下の世話もしています。初めはゴミ手袋をしていましたが、今はもう何とも思わなくなりました」とのメールが届く。

一斉に同じ経験を持つ方々から「私の時はこうしました、頑張ってね」のメール。心を癒し合わないと辛いことの多い年齢です。ひとの優しさが身にしみる日々です。

どこに行った。何を食べた。お喋りは尽きませ

んが、時には話の中に割り込んで来ることがあります。そんな時は「どびんしま〜す」と一声かける。土瓶の形をご想像して下さい。横から口が出ているでしょう。この一声で和やかになり、どびんどびんで話は広がってゆきます。

最近には爺婆たちも、持ち歩きに軽いアイパットに関心をもつようになってきました。3月16日の新製品発売日に、おばあちゃんたちも店頭に並び、何とか手に入れることができました。異人種がいるよ…。そんな行列の中の好奇心な目も「ほつてよ！」です。

82歳、85歳、89歳の三婆が「私たちもiPad（タブレット型パソコン）だけ持ってスカイツリーとやらに行ってみましょうよ」と言えるほど、世



80歳前後の方々が集まり合同傘寿のお祝い

の中は変わって来ました。そして、反っくり返り、反っくり返りiPadの画面に「634」が入ったあとと大喜び。どうにかノッポ全身の撮影に成功。浅草下町は人力車に乗って、「そうそうどこを回ってもらい

ましようか、お兄さん」。iPadで面白そうな場所を検索。これから爺婆たちも一生懸命、世間さまについてゆきますよ。

もう一つ。世間で初めての試みをこのお正月に実行しました。お独り様たちで元日会。元旦の朝、顔だけ洗ってホテルに集合、広いロビーで獅子舞の乱舞、吹抜けのロビー中央では出初め式の梯子乗り、華やかな年始行事を堪能して、「ではいいよお正月を！」と和食の部屋へ。

おっと、その前に年賀状をiPadでチェック。来てる、来てる。沢山のメール年賀状、初めてお屠蘇で今年も元気で、そしてお雑煮。「私、白味噌」「私、おすまし」と、関西と関東がさつと2つに分かれたのも面白い。おせち料理で舌鼓、「こんな賑やかなお正月、久しぶり」と嬉しそうな婆ちゃんたち。

何か一つ世の中の役に立つ ことをしてから解散

でもこれでは終わらない。

何か一つ世の中の役に立つことをしてから解散、と決めています。大学生とのコラボで日本古来のお正月談議をしました。80歳以上の婆ちゃんたちの、地方色豊かなお正月の思い出話は録音されて若者たち意識に残ることになりました。

「私たちもまだ世の中の役にたつことがあった…、よろしく願い申し上げます」

これからの生きる自信となって嬉しそうに帰宅の途につきました。それが何よりのこの日の収穫かも。華麗に加齢といきましょう。私たちワンモアステージあるのですもの。

PCを通じて人と出会い交流を深める ―発足して10年、地域とともに歩む―



松本シニアネットワーク会長

● 大月一夫

助け合いながら学び、交流を楽しみながら実践する――。この趣旨のもと、松本市が高齢者IT支援の一環としてコーディネートし、2003年に「松本シニアネットワーク」は誕生しました。

初心者向けのワード、インターネットなどの講習、上級者向けのシニア情報生活アドバイザー資格取得講座等を実施してきました。会員は約150名で地域毎の7グループに分れて、それぞれが独自性を発揮しながら、和気あいあいと学び合い活動をしています。

なお、全体研修として、モバイル通信の体験をはじめ、スマートフォンの活用なども学び資質の向上を目指しています。パソコンを通じて「人との出会いが生まれ、交流が深まる」ことを重視して、旅行や撮影会など会員同士の親睦を深める行事を積極的に企画しています。また、地域のイベントや活動に参加することで、地域住民との交流ができ地域に貢献することができました。

これからは、ICTを積極的に活用し、生活の質を高め、より豊かな生活ができるよう努めています。

きたいと願っています。

同好会の活動内容

シニアの皆さんが、現役から現在までに蓄えた知識、技術を会員相互に活用して、お互いに知識を向上しようと同好会を作り、活動してきました。現在は、次の四つの同好会を立ち上げて活動しています。①ログ同好会、②写真同好会、③どまの会同好会、④シニア情報生活アドバイザー有資格者同好会――。

(1) ブログ同好会は、毎月定期的に日を決めて活動をしています。ブログを開設したい、ツイッターを開設したい、ホームページで困っている等の問題がある会員の皆さんは、ブログ同好会の会場に、足を運んで問題を解決しています。

(2) 写真同好会は、写真が趣味の皆さんが参加して、写真で伝えたい事をどのように表現するか、仲間同士で技術を磨きながら、野山に写真撮影に行き成果を確認しています。自分たちの成果

を地域の皆さんに評価して頂くために、文化会館の写真展や、大学生との共同の作品展などに積極的に参加して、自己の技能向上に努めています。

(3) どまの会は、現在の各ブロックでの講習会には一寸満足できない、もう少しレベルアップしたいと言う仲間の集まりです。文書作成、表計算、ホームページ作成等、もう一歩上の技術を学びたい、もっと面白い事をしたいと、常に皆で考えながら新しいことに挑戦しています。ICTの進歩に遅れないよう出来ることは、何でもやろうと活動しています。

(4) シニア情報生活アドバイザー有資格者同好会は、経済産業省の外郭団体の資格試験を取得した会員の同好会です。現在13名の有資格者が、県の生涯学習センターなどからの講師、補助員の依頼を受けてボランティア活動をし受講者から好評です。地域の高齢者を対象に相談や、援助もしています。

各ブロックの取り組み紹介



新しい情報の研修会



●●●



「僕らの学校」での実演

ポイントなど、幅広い範囲をカバーして行っています。教室での勉強ばかりではなく、会員の親睦強化の目的から、毎月カラオケやマレットゴルフ等も企画して楽しんでいきます。時折、

クラブが加入している市民サポートセンターのイベント「僕らの学校」にも積極的に参加し、市民活動を活性化するお手伝いをしています。各種サポート団体も参加しますので、他団体との情報交換と交流にも役立っています。

クラブが発足10周年を迎える今年は文化祭を兼ねて、記念行事を11月に計画していますので左記のHPで報告します。(http://www.hotnet-m.jp)

スカイプの活用

平均年齢が70歳を超え、最高齢は米寿を迎える8ブロックは、普段の連絡に、スカイプを利用し、時には会議形式も採ったりしています。「一

シニアの皆さんは、市内の広い地域に居住しているの、パソコンを持って遠くの会場に行くには足の確保が問題です。そこで当クラブは、市内を7つのブロックに分けて、それぞれ近くの公民館や公共施設で活動をしています。

各ブロックでは、会員の要望をもとに勉強したいことを計画し、実施しています。パソコンの技能向上以外に、マレットゴルフ、カラオケ、お花見などの活動を取り入れ、シニアの健康づくりにも留意しています。次にブロックでの取り組みを紹介します。

度設定して置くといつでも気楽に利用できて本当に重宝しています。最初はどうかと思ったが、音声も非常にクリアーでお互いが隣にいて話しているようです。

しかも無料、年金暮らし族には最高ですね。会議の最中にアメリカ住まいの姪っ子とも繋がってしまい、話をしてみたら国内同士の会話と変わりがなく非常に驚きました」と、お話をしてくれたのは、今年からブロック長になったSさんでした。

第3ブロックは総勢43名の会員なので、パソコンのソフトに合わせて、XPとビスタのグループとに分かれ、毎週勉強会を行っています。大勢の皆さんが集まると結構のレベル差があるので、置いてきぼりを作らないため、ゆっくりの方に合わせた勉強会に気を使っています。

内容は季節に合った題材をテキストにとり入れ、ワードと、エクセルはもとよりお絵描やパワー

勉強会のあと食事会もして、心と体の健康と技能の向上に取り組んでいます。

年間の全体行事の紹介

当クラブの全体での取り組みと行事について紹介をします。

会員相互の親睦と、コミュニケーションを深めるために、毎年春と秋の2回日帰り親睦バス旅行を実施し、会員の皆さんから好評を受けています。時には県外のシニアネットクラブとの交流会にも参加し、沖縄や水上行ったことも記憶に残っています。

会員の皆さんが勉強した成果を、地域の皆さんに紹介する文化祭を毎年開催しています。市内中心地の文化会館を借りて、合成写真やパソコンで描いた絵などの展示をしています。またネットからの素材で作る飛び出す仕掛けの絵本や、印刷した立体ペーパークラフトづくりなどの実演も行い、多くの市民の皆さんと楽しむことができました。

クラブが加入している市民サポートセンターのイベント「僕らの学校」にも積極的に参加し、市民活動を活性化するお手伝いをしています。各種サポート団体も参加しますので、他団体との情報交換と交流にも役立っています。

クラブが発足10周年を迎える今年は文化祭を兼ねて、記念行事を11月に計画していますので左記のHPで報告します。(http://www.hotnet-m.jp)

地域に根差した高齢者支援をめざして



NPO法人ネットワークアシストたかおか 理事

● 小松裕子

1. フットワークのよさが NAT の信条

富山県高岡市に拠点をもつ NPO 法人 ネットワークアシストたかおか（以下、NAT）は、地域住民の情報化を助けることを目的に平成13年に設立された。活動分野は、福祉、教育、地域、技術の4つの柱を基本としているが、随時さまざまなプロジェクトが企画され、中学生から高齢者まで、幅広い年齢層のメンバー（約150名）によりダイナミックに再形成される。この多様性とフットワークの良さが NAT の特徴である。

現在も、児童のロボット競技支援（ロボットプロジェクト）、生活や文化の保存（100年プロジェクト）、埋文人プロジェクト、視覚障害者への ICT 支援（愛のプロジェクト）など様々なプロジェクトがあり、毎年、全プロジェクトが集まり交流するフェスタも開催している。特に、主として高齢の地域住民への ICT 支援（地域プロジェクト）は、長年継続している活動の一つで、

予約なしに参加できる「なんでも相談会」（月2回）と高齢者会員制の「PCクラブ」（月4回）を定期的に開催する他、「指導者養成講座」と「ICT 講座」を年数回実施している。

2. ICT 利用に向かう高齢者の傾向

（1）はじめの一步に踏み出すシニア

「なーんもわからないけどいいいけ？（なににもわからないのですがよろしいでしょうか）」と不安げに高齢者が部屋を覗く。「みんなそうですよ」と誰かが応える。「今日はプリンタも持ってきたちゃ（持ってきたわ）」と大きな風呂敷包みを抱えてきまり悪そうに部屋に入ってくる。「えー、そりゃ大変やったね。どうしたわけ？（どうしたの？）」と声をかけあう。

「なんでも相談会」には年間150名前後の相談者が来る。その多くは60歳代、70歳代の高齢者で、ほぼ全員が自分のノートパソコンを持参し、中には古いデスクトップパソコンを抱えて相談に

来る強者もいる。相談に来たきっかけを尋ねてみると、10年前全国で実施された IT 講習会時に、「おばあちゃんには無理」と言われたり、一度は講習を受けたけれど結局パソコンの購入を躊躇したりした人が、今、子供からお古のパソコンを貰ったり、安価で使い易くなった（はずの）パソコンを手に入れたり、町内会の当番になったからと、新たに「やってみたい」という気持ちになったとのこと。ところが、いざ始めると、お古のパソコンは使いにくい、どこで聞けばよいのかわからない、子供には面倒がられる、自分の機械で教えてもらわないと家に帰ってわからないと、途方に暮れて訪れるのである。IT 講習から10年、「一から教えてほしい」というニーズが今また表面化している。



IT フェスタ：全プロジェクト大集合
高齢視覚障害者が小学生にゲームルールを説明中



なんでも相談会：一人の高齢者に一人の支援者



なんでも相談会：支援者のほうが多いことも。そっと見守る

(2) あと一歩がカギのアクティブシニア

会員制の「PCクラブ」は、会員40名程度、平均年齢70歳で最高齢は80歳代後半という高齢者による高齢者同士のパソコン教室である。中心となるNAT講師（70代後半）の表計算の勉強会はクラス分けをするほど人気がある。ここではリアルな高齢者コミュニティが確立しており、個々人の学習意欲もさることながら、集まって皆と一緒に学習する楽しみ、年に数回の旅行やバーベキューが人気の秘密と思われる。毎週ほぼ全員が出席するこの教室の高齢者たちは、学習の機会をうまく得ることができ、家族の理解、収入の不安が少くないなどを背景に、情報化の波にうまく乗ることができたアクティブシニアとみなすことができる。しかし、現状に満足しており、新しいことに慎重な年代でもあるため、iPadなど新しい情報機器には関心はあるものの、今はまだ社会の流れを遠巻きに見ている。あと一歩の後押し支援が次なる展開へ大きく進む可能性は十分持っている。

3. コミュニケーション力は支援者の資質（技術）

ボランティアでの支援活動の難しさは、どこまで支援するのか、どこで支援を打ち切るのかの判断である。また、相手の気持ちを推し量り、相手にどう配慮するかは支援者として重要なことである。高齢者が困っているのを目の当たりにした時、助けてあげたいと思うのは自然な気持ちだが、勝手な操作や善意の行為が責任問題に発展する可能性も大いにある。あえて手を出さず傍で見守るという姿勢には意外に理解と経験が必要である。

NATでは、こうしたいわば、状況判断力とコミュニケーション力を支援者が持つべき資質（技術）と捉え、「指導者養成講座」ではマナーやコミュニケーションに関する演習や実習に時間を多く割くようにしている。単なる知識の差は、さまざまな年齢や経験を持つ支援者が相互にカバーし合うことで解決できるとし、相手に配慮できるかどうかはそれぞれひとりひとりの支援者に必要な能力と考えるからである。

4. 地域に根差した支援をめざして

全国的にみると、アクティブシニア同士がネットを通じて交流する事例は多く見られる。これからネットワークはより使い易くなるであろう。しかし、高齢者のICT利用の多様なニーズに応えるには都市部に比べ地方では、学習機会も支援体制も人材も十分ではない。

地方での支援活動から見えてくるのは、多くの高齢者が次への一歩に不安を持ち躊躇する姿でもある。こうした高齢者がICTを利用するにあたって、急がず安心して続けることができるような場所がNATでありたいと思っている。

現在NATでは、さまざまなプロジェクトが活動し、参加者には高齢者のみならず、障害者もいれば小学生もいる。情報の専門家もいれば家庭の主婦もいる。大学生が遠隔からサーバーを管理している。この多様性を活かし、高齢者に寄り添いながら、幅広い年齢層と活動範囲の広さを活かしたイベントを織り交ぜ、フットワークよく支援を続けていきたいと考えている。

脳を活性化するミニコミ誌講座とiPad講座



NPO法人花パソコン理事長

● 馬場次代

子育て後の女性を

PCインストラクターに

65歳以上の人口が23%以上（平成23年現在）と言われている。日本女性の平均寿命が世界一。人生50年とは遠い昔の話である。

子育てや仕事が終わった後、もうひと踏ん張りしてみよう、パソコンのスキルはないけど勉強しながら自分がパソコンができてなくて苦労したことを忘れず、これからパソコンを始めようというシニアのお手伝いをしたい！

そんな女性たちがパソコンインストラクターとして活躍できるように養成・支援したいと2005年1月に花パソコンを立ち上げた。それから7年、2人でスタートした花パソコンのスタッフは現在15名、全員女性で平均年齢は60歳をちょっと超えている。この年代の特徴は自分自身の健康にも少し不安要素が出てくること、そして自分の親の介護や孫の守りなどが重なってなかなか自分のための時間が使えないことである。

ですから花パソコンのスタッフとしても仕事は週に1〜2日ぐらい。

内容は3〜4会場で開催しているパソコン講座、認知症予防講座、iPad講座などの講師とサポーターである。

家事や介護、孫の守りをしながらインストラクターをすることは大変な部分もあるが自分自身の楽しみとして、生きがいとしてみんないきいきと活動している。

でも、これはシニアにとってはとても大切なことである。社会と関わることで自分自身の再確認と自分の存在価値を認めてもらうこと。人に喜んでもらうこと。これらがいきがいとなって頑張る源になっている。

実は花パソコンの目的はあと一つある。

それはシニアのICTをサポートすること。

自分たちとほぼ同年齢や少し上の人たち。

元気で自立して毎日をいきいきと暮らしたい。でも、年を重ねるにつれ、できないことが多くなってくる。昨日までできたことができなくなる。物

忘れがひどくなる。「歳がいったなあ」ってつくづく感じる。そんな気持ちで自分自身の体験と重なり、サポートするにも気持ちが悪くなります。でも、長寿社会、まだまだこれから先が長いです。

昔と比べるとマイナス10歳が今のシニアの体年齢だと聞きます。90歳と聞いても驚かなくなった。でも、長生きできる分、認知症になったら困るなあってみんなが思っています。どうしたら認知症にならずに寿命を全うできるのだろうか？ゲームやクイズ、体操などいろんなジャンルの予防プログラムがある。でも、医学的にはまだはつきりとした原因、予防、治療が確立されていないのが現状である。

でも、毎日を笑って、楽しく前向きに過ごすことがよさそうです。

仲間づくりで認知症を予防

今日は花パソコンが行っている認知症予防講座についてご紹介したい。

これは1週間に一度、1時間半、地域のシニアがワードでミニコミ誌を作成する講座である。いくつになっても新しいことを覚えるということは楽しい。そして外出することも大事です。ミニコミ誌作成講座では5〜8人程度が1グループで構成されている。名前をニックネームで呼び合い、わからないところはお互いが教え合いながら学ぶ。昔に戻って小学校の頃のクラスのような雰囲気です。4ヶ月ぐらいでオリジナルのミニコミ誌を作れるようになる。自分の趣味のことや毎日の



笑いが絶えないミニコミ誌作成講座

散歩の周りの風景などパソコンスキルはまだまだでも今まで歩んできた人生、いっぱい書くことがありそうです。

私たちもびっくりするぐらいの素晴らしいミニコミ誌が出来上がる。「何回聞いても覚えられない」「1週間経つとみんな忘れてしまった」などなど不安な声が聞こえるが、その人たちが4ヶ月後には「楽しくてしかたがない」「このまま見捨てないで。ずうーと学びたい！」ってほとんどの人たちが言ってくたさる。この講座の本当の魅力はワードを学ぶことではなく、仲間づくりなんです。シニアが外に出て地域の人たちと交流する。これが一番の認知症予防に効果がありそうです。私たちの目的はこのプログラムに参加することに



依頼者に喜ばれた俳句の冊子

よって地域の高齢者が新しい友達をつくったり、一緒に何かを作り上げる喜びや達成感を感じていただくことである。パソコンだけではなく、他のことでも交流が広がり、仲間として長く活動していけるようサポートしていけたらと思っている。

ワードで俳句の冊子も作成

オリジナルのミニコミ誌を作成した後はさらにワードを復習しながら新しいことを学んでいくわけですが、今度は地域の人たちの手助けをしながら継続していきます。パソコンは使わなければ忘れてしまう。せっかく覚えたワードの機能、地域の方たちの困っている人たちのお手伝いができたということでもワードで作ってほしいことを募集します。今まで、町内の回覧板の名前シールの作成、ボランティアグループの名刺づくり、趣味のクラブ活動の会員募集のチラシづくりなど。

中でも障害者の方が今まで作った俳句を冊子にしてほしいといわれたときは今まで習ったことのないワードの袋とじの機能や冊子作りに挑戦！完成して喜んでいただいた時の感激が益々メンバー間の絆を深めた。

昨年からはiPadを使った認知

症予防に役立ちそうなアプリの紹介などの体験講座も実施している。主にパソコンが苦手な情報化から取り

残されがちなシニアを対象にICTの入門としては比較的ハードルが低く、道具を使わなくても自分の手で簡単に操作できるiPadを使って認知症予防に役立つ脳の活性化ができるアプリの紹介をしている。

電車の中で若い人たちがスマートフォンをサクサクと使っているのを遠巻きにしていた人たちもiPadに実際に触れてみると自分にもできるという自信に変わります。タブレット端末はシニアにとってこれからは非常に役に立つツールとなるであろう。

iPadでも仲間づくりを目指します。楽器アプリで合奏クラブもはじめた。ピアノ、ドラム、鉄琴、ギターなどiPad一つでいろんな楽器が演奏できます。

合奏した模様はYouTubeにアップしてみんなに見てもらいます。来年あたり、iPad合奏コンクールを開催するのが今年の大きな目標である。



ipad

携帯電話からはじまる安心・安全なまちづくり —地域づくりは井戸端会議から—



NPO法人きんきうえぶ理事長

寺田美哉子

パソコンを学びたい女性たちの
ニーズから生まれた活動

きんきうえぶは、南大阪で活動する女性中心の市民団体である。拠点は、大阪府富田林市から委託を受けた介護予防事業『街かどデイハウスきんき茶ろん』だ。(街かどデイハウスとは、65歳以上で介護保険を使用していない市民が利用できる高齢者の自立生活を地域で支え合う住民活動である)

また、富田林市の他、羽曳野市、河内長野市等、南大阪一円でパソコン講座を開催し、教室は22カ所、一昨年の受講者数は1万名を超えた。このパソコン講座の活動を支える講師は、40〜50歳代の主婦が多い。街かどデイハウスのスタッフもパソコン好きの主婦である。

14年前、きんきうえぶ発足のきっかけは、パソコンを使いたいけれど使い方がわからないので困ったという私をふくめた地域の声である。

私が初めてパソコンを購入したのは、1998

年。当時、ノートパソコンは30万円以上もしていた。ヘソクリを貯めてやっとパソコンは購入したもの、わからない事だらけで、しかもパソコン教室へ通うお金も無いので、考え付いたのが、地域情報誌で仲間集めをし、互いに勉強し合うという方法だ。

当時のスローガンは、『井戸端会議をパソコンの話に！』である。お菓子を食べながら、お茶を飲みながら、パソコンの勉強会を開催し、メーリングリストのメンバーは全国に広がり、800名を超えた。NPO法人の認証と共に会員数は縮小し、地域活動へと移行したものの当時の勉強会のスタイルは今も引き継がれ、パソコンサークルの活動として、14年間続いている。

きんきうえぶでは昨年度、内閣府の『新しい公共支援事業』にて『高齢者対応ICTで作る安心安全な街づくり』と言う携帯電話を使った事業を大阪府に提案し、採択された。これは、当法人だけではなく、富田林市高齢介護課他、6団体で協議体を作り、申請したものだ。

この事業を企画申請したきっかけは『離れて暮らすひとり暮らしの親に携帯電話が使えるようになってほしいと思っている人は、多いだろうな』と思ったからである。

私の母は、現在81歳。長く寝たきりだった父は昨年亡くなり、一人暮らしになった。そこで母に、携帯電話をプレゼントした。もちろん、一人暮らしの母が心配だからであり、便利に使って貰えると思っていた。ところがショックな事に、母は携帯電話を仏壇に飾ったまま、出掛ける時は『落としたらあかんから』と言って、持ち歩かないでいる。母のようにせっかく携帯電話をタダで入手しても、使えない高齢者たちが大勢いるのだ。

東日本大震災と携帯電話

きんきうえぶでは、4年前から街かどデイハウスや商店街の店先、福祉施設で『携帯電話の災害用伝言板体験教室』を実施している。

昨年の大震災では、震災直後、通信が混みあい連絡が取れない状態が続いたが、携帯電話の災害用伝言板サービスは、有用な連絡手段とされていた。しかし、せっかくのサービスを『知らない』人が多く『知っていても使い方がわからない』ので使えないのだ。

きんきうえぶの事務局である井上恵子さんの実家は仙台にある。震災直後、全く連絡が取れず、家族を心配されていた様子は他人事とは思えなかった。

今後、来るであろう災害時まで一人でも多くの人が災害用伝言板やメールを使えるようになる

図1

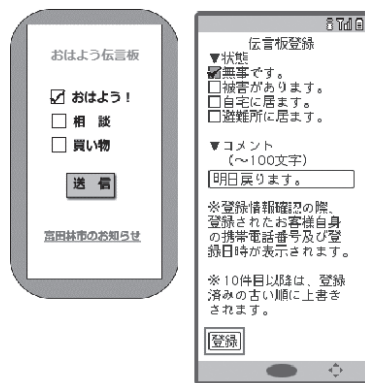


図2



毎朝7時に「おはようございます！」のメールが届き、利用者はメールに記載されたアドレスを押す事で、「おはよう！」と「相談」と「買い物」のチェックボックスがあるサイトへ飛び、安否確認にもなる挨拶や、困った時の相談、買い物依頼が気軽にできる。

利用者の情報は、ステーションと呼ばれるきんきうえぶ事務所内のパソコンで管理され、パートの女性が対応している。（図2参照）

また現在ステーションは、携帯電話教室の場にもなっている。毎朝、5〜6人がステーションを訪れ、携帯電話のあらゆるサービスを勉強している。（写真参照）災害用伝言板はもとより、メールや万歩計、カメラ、写真添付、QRコードや赤外線システム、デコレーションメールなどであり、ある一定の山場を越えた人は、携帯を情報ツール、コミュニケーションのツールとして手放せなくなる。

高齢者にICTを使ってほしいのは周囲の若い人たち

しかし、この事業を進める上で、今、大きな壁にぶち当たりつつある。その山場を迎えるまでの取っ掛かりの問題であるが、高齢者は自分を高齢者と思っていない人が多い。そして、電話は自分が話したい時、用事のある時だけ話せば良い。母は、ワンプッシュで娘に電話できる携帯電話で掛けてくるものの、家の電話にしか出ない。同様に多くの高齢者は、携帯電話は持っているものの掛けても出ない。

このシステムを紹介しても、「じゃあー○○さんに紹介しておきますね！」と、自分が対象になっていないし、また数日体験しても「毎日、メールが来るのは、うっとおしい」と、断ってくる人など。毎日、当たり前のように数十通のメールを受けている私たちには理解できないけれど、高齢者はまず、メール（液晶）の画面に書かれた文章が自分とは縁遠く感じる人が多いのではないだろうか？

当然のことながら、自分も高齢者に近づき、今年には55歳。この年になって感じる不便さも多い。それなのに、この事業を通して自分は母を思う娘の立場でシステムを考えたものの、高齢者自身の立場ではなかったように思う。誰も見守られたいわけではないし、今の状態で充分満足な人が多いのである。連絡が取れなくて困ったり心配なのは、本人ではなく、周り（家族等）なのだ。

そこで考えた結果、身近な地域情報をメールに載せるべく、今はこのシステムを応援する富田林市の地域のお店を募集している。

高齢者は、自分が住む地域を愛している。いつまでもこの場所で元気に暮らし続けたいと願い、役立つ情報に敏感である。

高齢者にICTを勧めるには、身近な地域の話題、つまり、井戸端会議的な情報が必要なのだと、痛感している。これからは『携帯電話で井戸端会議を！』である。この地域のシステム『おはよう伝言板』が全国へと広がり、携帯電話を使いこなせる高齢者が増える事を切に願う。



ステーションの様子



ステーションの様子

元気な高齢者が集うデイサービスの場



NPO法人 つれもてネット 南紀熊野 代表理事

千品雅彦

過疎の山村集落に住む元気なお年寄り達が、新しい楽しみを見つけ、集う場がある。自身で買収したパソコン、デジカメ、携帯電話（スマートフォン）など、今時のおもちゃを持って集まってくる。

ここには、大画面テレビ、テレビゲーム、そしてパソコンにつながったプリンター、イメージスキャナなどがある。山村集落とはいえ、ここではWiFiを使ってインターネットを自由に使える。

今時のおもちゃを買った自慢話、農作物の成長、孫の成長などの話をしながら一日を過ごす。

ICTの話が好きで、地域の「人つながり」の柱になっている人がいて、ここに集う人と一緒に楽しんでいる。

ここは、公民館であったり、集落の集会所であるが、過疎の山村集落で人が集う場にと、行政が準備した元気な高齢者が集うデイサービスの場（「ICT情報交流サロン」）である。

自前の弁当、お茶、お菓子を持ち寄って一日を

過ごす。過疎の山村集落に住む元気な高齢者達を「新しい学び」から「新しい人つながり」に導き、地域に新しいコミュニティを創り出す場になっている。

元教員らが情報生活アドバイザーに

紀伊半島・和歌山県南部の田辺市を拠点にUターン、イターンした人達など地域に住むシニアがIT機器を使ってコミュニティづくりをしようと活動するNPO法人つれもてネット南紀熊野は、地域の行政職員と共にこのような場づくりに取り組んでいる。（つれもてネット南紀熊野：<http://www.tsurenote.net>）

「つれもて」とは、「一緒に」というこの地方の方言である。つれもてネット南紀熊野の役割は、行



サロンに集う人たち



サロンの風景

ブログでコミュニティづくり

政が準備した場に、ICTの話が好きな地域の人をアドバイザーに加えて貰うことである。

過疎の山村集落では、元教員、元市町村職員など地域の行政の仕事を経験した人が、「新しい人つながり」を生む主役になる。地域の人達から信頼を得ているからである。

地域に住むこのような人達が、シニア情報生活アドバイザー（シニア情報生活アドバイザー…<http://www.rmda.or.jp/mellow/adviser/>）の資格を取得し、この場に加わる。2010～2011年には、田辺市内4地域（大塔、中辺路、本宮、龍神）に各々2～3名、合計10名のシニア情報生活アドバイザーが生まれ、それぞれの地域でICTの話が好きな人としてコミュニティづくりに取り組んでいる。

この人達が、今、コミュニティづくりの道具



「思い出」作りをする93歳のお爺さん（手前左）

として活用しているのが、地域ごとにあるブログポータルである。（ブログポータル「大塔の元気な仲間たち」：<http://genkiotou.fc2.com/>）

ブログづくりは、高齢ではじめてパソコンに触れる人にとっては、大変厄介である。日常の何気ない風景や趣味のこと、地域の出来事などを写真に収め、その写真に一言コメントをそえる。

これがブログネタである。

最初の厄介なブログづくりは、地域に住むシニア情報生活アドバイザーと一緒に仕上げる。

シニア情報生活アドバイザーにとっては、ブログネタになる情報が「新しい学び」として新鮮な知識、地域情報になる。

ブログをつくり「新しい学び」「新しい人つながり」ができた喜びを、過疎の山村集落に住む元気な高齢者と同じ目線でわかちあうのである。

ひたすら自分史づくりに取り組んでいる93歳のTさんがいる。高齢で手が不自由になり、字を上手く書けないのだという。キーボードに向かって、自身のこと、地域のことなどを記録し続けている。

記憶を辿って

いる姿が、この場に集まる元気な高齢者達のパワーの源になり、一つ一つの記録が、地域の歴史を感じる話題になっている。

人生で経験されたほとんどの

ことを書き終え、既に2冊が製本されている。一緒に仕上げているのが、それぞれの地域でICTの話が好きな人としてコミュニティづくりに取り組んでいるシニア情報生活アドバイザーである。

シニアの願いを叶える場

ここでも、過疎の山村集落に住む元気な高齢者と同じ目線で、この地域に暮らしてきた喜びをわかちあうのである。つれもてネット南紀熊野が、地域の行政職員とともに「ICT情報交流サロン」を運営する中で学んだことは、過疎の山村集落では、元教員、元市町村職員など地域の行政の仕事を経験した人が、ICTの力を得て「新しい学び」の場をつくり、「新しい人つながり」を生む主役になるということである。

「住み慣れた地で住み続けたい」「新しい人つながり」「新しい学び」を求めたい……といった元気なシニアの願いを叶えられるような「場」を、ICTの力を使いながらつくって行くことが、NPO法人つれもてネット南紀熊野が目指しているところである。

「ICT情報交流サロン」のアドバイザーの1人が、地域の人たちに向けて閲覧板で知らせた広報記事を紹介する。ICTの話が好きなアドバイザーがいて、各種IT機器が備わり、インターネットも使える「日だまりサロン」という「場」があることを伝えている。

「日だまりサロンのいとなみ」

「それってバーですか、それとも飲み屋です

か？」と尋ねられました。バーでも飲み屋でもありません。これは田辺市が総合計画の中で掲げている「魅力あふれるまちづくり」活力ある山村づくりの推進「事業のひとつなのです。本宮、龍神、中辺路、大塔地区は、インターネットやテレビなどに関してはよい環境が整えられています。これらの情報・通信技術を使って生活を便利に楽しくできないかと始められた事業と聞いています。それぞれ、龍神サロン、本宮サロン、中辺路サロンと呼ばれているのですが、大塔（三川）では「日だまりサロン」と呼ばれています。昨年10月からのサロンの様子をお知らせします。サロンには、パソコンが2台、46型のテレビが1台、プリンタ、スキャナ、ゲーム機とそのソフト、テレビ電話があります。テレビは、パソコン、ゲーム機、それにインターネットにつながっていてインターネットの画面や文章などがテレビの画面いっぱいの大きさで見ることができるようになっています。「インターネット」を使って見ようということから始めました。

【中略】

「日だまりサロン」の日常のいとなみの様子を細かく伝えている」

いま、私たちの身の回りには本当にたくさんの情報があふれています。しかも、ほとんど一方的に流されてくるものばかりです。テレビも、新聞も、ラジオも、インターネットもたくさんの情報を私たちに投げかけてきます。すべての情報をただ受け入れるのではなく、情報を選ぶ力が必要になってくるのではないのでしょうか。

サロンが、そんなお手伝いができれば最高です。

シニアが笑顔で集うICTサロン —「メダカの学校」がいつしか鯉の滝登り—



シニアネットはまだ会長 ● 長尾康一

島根県は、秋田県と並んで高齢化が最も進んでいる県である。高齢者は社会のお荷物にならないように助け合って、頑張らなくてはならない。高齢者が情報化社会の蚊帳の外にいるのも悲しい。

10年前、何も今さら、勉強しなくても…という

声を尻目に、パソコンがしたいというシニアが、助け合えばできることを信じて教室を立ち上げた。♪「だーれが先生か見てごらん みんなでパソコンしているよ」「メダカの学校」だね」と言って笑った。

「来週はどこですの」「ジプシーだね」

「誰が教えるの」「順番で講師でしょ」

「テキストはどうするの」



手をつなごう！

「シニア向けテキストは探してもないよね」「何か探して」「自分たちで助け合ってやるっきゃないね」

不幸は発明と団結を生む。集まったものは幸いに、高齢者になっても好奇心の強いアクティブシニア（行動する高齢者）だった。

パソコンは所詮ツール（道具）だ。このツールを使ってシニアが高齢社会で何をするかだ。

スキルアップだけが主たる目的の会ではないから「デジカメ

ツアー」「研修旅行」や「グ

ランドゴルフ」

「運動会」

など仲間づく

りのイベント

はオフの会と

は考えないこ

とにした。

とにした。

ICT仲間づくりから

年はとっても新しい発見は楽しい。できた喜びを共有できるのもいい。教室を笑顔で楽しくやろうということからICTサロンと名付けて、役割分担を設け、助け合ってすることにした。忘年会では替え歌までつくって歌った。

♪（お座敷小唄の替え歌）

三、今日もパソコン インターネット

趣味のある人 味もある

時代に関心持ちながら

パソコン打つ人ほけません

チャンチャンチャラッタ チャンチャンチャ

ララッタ

四、シニアネットが好きになり

ほどの良いのにほだされて

サポーターなんかにはせられて



ICTサロン講座風景



サポート風景



振り込まないで！

電子紙芝居による啓発活動（出動約60回）
パワーポイントを使って、社会的課題を取り上げた電子紙芝居をシニア目線で作ろう！ということになり、プロジェクトチームをつくり、僅かな予算をつけ、警察から情報をもらって始めた。最初の作品は「振込め詐欺」と「交通安全」で、高齢者クラブやお寺を回って活動した。



自動貸出機



タブレット端末

タブレット端末を用いて、電子図書を読むことができる。本を借りたり、返しに來たりせずに、自宅の端末で電子図書を借りて読むことができる。これらの電子機器の使い方に市民がなれるまで、私たちシニアネットはまだの会員が交代で図書館サポーターとして活躍する予定である。

押しも押されぬ人となり
チャンチャンチャラッタ チャンチャンチャラッタ

あなたもICTリーダー

シニアの情報弱者はたくさんいる。これを解消するにはシニアの弱点を一番良く知っているシニアのICTリーダーをたくさん養成しなければならない。他力本願でも能力のある人のワンマンショーでもダメ。助け合う気持ちとシステムが重要である。

「主婦しかやったことのないものが、なんで人の前に立ってパソコン教師ができるの」という抗議の声も出たが、なんとか説得して、サポーターから始めて、立派な講師が務まるようになった。仲間づくりをしてきたからできたことだ。

いきなり講師をしてもらうのはハードルが高すぎるので、チームティーチングをして階段を登っていくことを思いついた。

「チームティーチング」とは、一つの講座を複数の講師が担当してすすめるやり方。メイン講師がいて、サポーター3名で講座を運営しているが、サポーターの1人か2人がメイン講師に替わって講座の一部を行うやり方。他人が作った教材で、講座の一部、短い時間を担当することにより、講師としての自信と自覚が生まれる。やがて、自分で教材を作り、一人前の講師になる。開発部はその手助けするためにつくった。

ICTを活用して豊かな高齢社会を目指す活動

シニア向けとしては「浜田の今昔」「民話」などを追加、デイサービスなどからも声がかかり忙しくなった。

子育て支援として、幼児・児童向けのものも作ろうということになり、「こどもの交通安全」「昔話」や「ふるさと学習」になるようなものを作品化した。これでやると画面が大きくなるし、アニメーションを使えば動きも出てくる。音楽も取り込んでできるので多くの子ども達に喜ばれた。

電子図書館をサポート
浜田には本を借りるのに、人手を煩わさずに済む新しい図書館ができる。

OPAC（蔵書検索システム）を操作して本を探す。図書館HPで予約状況を確認し、予約棚で本を入手する。自動貸出機で貸出手続きをし、自動返却機で返却を行う。

地域貢献と仲間づくりを目標に

ーシニアの知識や経験を活用ー



シニアネット基山&シニア情報生活アドバイザー佐賀代表

● 久野美津代

シニアネット基山について

シニア情報生活アドバイザー佐賀の母体であった、シニアネット基山の会員は他県からの転入者がほとんどである。会員は平成24年3月末現在57名。男性32名 女性25名 会員間の連絡はメッセージリストでおこなっている。

基山町は佐賀県東部に位置し、佐賀県庁までは35^分。福岡県に隣接し福岡市のベッタタウンであり、新興住宅地が多い。

シニアネット基山は1999年5月シニアネット久留米の基山支部として発足、現代表の店舗の一部で週2回の勉強会をはじめた。会場は基山町の中心商店街（きやまモール商店街）内だったため、勉強会に来るシニア30名前後の会員が商店街へ出入りしていたことになる。商店街の賑わいづくりの一端をになっていたのではないか。会員が増えるに従い、会場が手狭になり、2回のうち1回（現在は2回とも）は会場を町民会館へ移し現

在に至っている。

基山町は新興住宅地で新聞購読は福岡版、住民の通勤や通学も福岡市が多い。これらを背景に、定年退職後、地域住民との交流も少ないシニアの止まり木として、パソコンやインターネットを通じて、シニアの知識や経験を生かしながら、地域貢献と仲間作りを進めようと「シニアネット基山」が設立された。モットーは「奉仕されるより、奉仕しよう！」

新入会員は一番に「メールの送受信が出来るようになること」を目標に指導している。

会の運営方法は全会員を班分けし、1ヶ月ずつの班当番を決めて世話役会で決定したことを当番の班が雑用的なことからほとんどの世話をすることにしている。

自分が当番になった時の大変さを知っているため、全員が協力的で、「奉仕されるより、奉仕しよう」の精神が根付いているといえるのではない

現在の1年間の主な日常の活動概略は

- パソコンの勉強会は週2回*2時間。（1時間は相談や情報交換。1時間は講習会）
- レクレーション（懇親会含む）月1回（仲間づくり大いに役立っている）
- 町主催の文化祭に参加 テーマを決め1年がかりで班に分かれて町中を歩き、資料集めをする。
- 基山町主催「ふれあいフェスタ」に参加（デジカメ写真の町民会館ロビー展）
- 基山町主催のIT講習会の講師、サポーター（町はIT講習会を2001年から現在まで継続）
- 助成事業
 - ・2003年佐賀県「炎泊記念地域活性化事業」の助成にて、東部の町のホームページを作成した。
 - ・2006年九州ろうきんの助成 商店街関係者対象のパソコン初心者講習会とホームページ作成講習会を開催。現在は商店街もシャッター通りと化し、アクセスできなくなってしまうていることは残念である。
- ・佐賀県リーダー養成講座
 - 平成21年に佐賀県がマイクロソフト社と「ICTによる地域活性化に関する覚書」を締結し、当会は「シニア講師養成講座」を10〜20名が受講した。
- 佐賀県警察本部とサイバーボランティア協力の覚書を取り交わした。
- 経済産業省の外郭団体である「ニューメディア開発協会」からの要請で、認定資格「シニア情



パソコン勉強会



遺跡巡り



文化祭の様子

報生活アドバイザー」の佐賀県内最初の養成団体となる。

佐賀県へ養成講座の提案をして採択され、佐賀県とシニアネット基山共催で養成講座を開講した。

その時の合格者は15名で、既認定者と合わせて17名となった。この認定者たちを活用するためシニア向けのパソコンリーダーの団体を設立した。シニアネット基山は県庁所在地の佐賀市からは遠く、また活動の趣旨も少し異なっていることからシニアネットとは別の団体としての設立だった。

シニアネット基山は「シニア情報生活アドバイザー佐賀」とは違って、パソコンの勉強だけでなく、パソコンは二の次。レクレーションだけの参加者も歓迎している。勉強会に参加することで仲間と集える楽しさと自分が持っている知識が役に立ち喜ばれることで、入会当初元気のなかった人が、会に参加しているうちにだんだんと元気になり、活動的になっていく姿をみるにつけ、当会の活動の大事さ、必要性を感じている。

シニア情報アドバイザー佐賀について

「シニア情報生活アドバイザー制度」とは経済産業省の外郭団体（財）ニューメディア開発協会が、シニア情報アドバイザー（以下SIIA倶楽部）として認定しているパソコンの認定資格である。

「SIIA倶楽部」は2009年度に、佐賀県情報課とシニアネット基山の共催で開講した「シニア情報生活アドバイザー養成講座」の合格者と既取得者合わせて17名となり、シニア情報アドバイザーのみの会員に特化した別団体として発足した。

2010年度には佐賀県長寿社会振興財団が養成講座を開講し、5名のアドバイザーが加わった。

2011年度も佐賀県長寿社会振興財団が養成講座を開講。6名の合格者がでて、佐賀県のシニア情報生活アドバイザーは計28名となった。2011年度には「SIIA倶楽部」も養成団体となり、佐賀県は3養成団体となったが、検討の上、「SIIA倶楽部」に一本化することになった。

パソコンを指導していく立場から、自分たちのスキルを上げるために、月に1回4～5時間の勉強会を開催している。メイン講師としての練習も兼ねて、一昨年までは交代で、得意とすることを仲間内で講習していたが、昨年から若いプロの講師から講習を受けている。

「シニアネット基山」と同じく「佐賀県高度情報化推進協議会（高情協）」のシニア団体活動支援の助成をうけ、インターネット体験講習会などの講習会を開催。また、アドバイザーは県内各地に分散している利点を生かし、各地区で定期的に勉強会を行いながら、県の支援事業を受けてICT利活用講習会を開催している。

2012年度は「シニア情報生活アドバイザー養成講座」や会員のリーダー養成講習、各支部での講習会、勉強会、iPadの指導者養成、老人会等へのiPad体験講習会などを計画している。

県の支援事業、高情協からの助成と佐賀県社会福祉事業団から「佐賀県地域振興基金」の助成金を受けることが出来たが、使途に厳しい制約があり、思案中である。

シニアがシニアに教えることの大事さがよく話題になるが、シニアのリーダーは若者のように学校で正規に基本から学んでいるのではなく自己流の教え方をしている者が多く、受講者にとってもシニアの立場にたった教え方の勉強をしているシニア情報生活アドバイザーの存在意義は大きいだろう。今後の課題はシニアを指導する良い講師の養成と講師の仕事が継続可能となるしくみ作りである。

「常に楽しく」を活動の基本理念に —シニアのシニアによるパソコン講座—

NPO法人 沖縄ハイサイネット 理事長 ● 砂川正男

海外のシニアとも友好交流

沖縄ハイサイネットの活動は、「常に楽しく」をモットーとして、12年目を迎えました。その間、パソコン講座の修了生は、延べ1万2000人になりました。

55歳から80歳代のシニアが対象で、生活に直ぐ役立つ便利な機能と趣味に活かせるパソコン学習がメインです。

沖縄ハイサイネットは、平成12年7月5日に結成され、次ぎのとおり、その理念と目的を定めた。

PC学習は、目的ではなく手段である。

たえず、スキルアップを図り、自らが人材になる

①人のため、世のために尽くすシニアたれ

②身近な人を大切に、地域や社会に貢献

③「常に楽しく」を活動の基本理念とする

活動方針は、シニア向けパソコン講習会の実施と国内・海外シニアネットと友好交流を推進することである。

パソコン講座は、沖縄市のコリンザ教室をメインに、うるま市じんぶん館、那覇市てんぶす館の3教室で18クラスを開設して、笑顔が絶えず好評である。このうち沖縄市の「コリンザ教室」一般の職業のための講座は、競合を避け影響を及ぼさないよう民間の事業者に配慮している。

海外交流会は、これまで、現地を直接訪問して友好交流を深めたのが、台湾台北シニアネット、韓国江南区シニアネット、ハワイ州沖縄県人会のシニアである。そして、上海市のシニアと友好交流を実現させたいと考えている。

沖縄ハイサイネットがめざすのは、ICTによる高齢者の生きがいであり、仲間づくりである。いつも元気で仲良く、地域のために役立ち、社会に寄与する頼れるシニアになることである。そのために、パソコンを学習し、ツールとして活用して、人と人との対話を広げ、コミュニケーションを図るのである。

私たちシニアにとって、パソコンは、生活に役立つ便利なツールであり、趣味に活かせる大切な

機器である。

沖縄が誇る文化である琉球舞踊や琉球料理、琉球泡盛を発信するために、インターネットや音楽の取り込み、デジカメ教室など、実に多彩な教材を使って、講座を開催している。

「活力ある明るい社会」を目指して

次に、うるま市「じんぶん館教室」室長 名嘉山八重子の活動を報告します！

ワープロの小さな世界を脱皮して、パソコンの世界へ入った時は、宇宙へ飛び立ったような気分でした。こんなに素晴らしいパソコンを、地域の皆さんに伝えなくてはと始めたのが「じんぶん館教



首里城



沖縄の文化
(エイサー)

青年たちの熱い
エイサーの演舞



エイサーまつり



ハイビスカス

室」でした。

ひと頃は、受け付け開始から一時間そこらで満席でした。今は「初級講座」2クラス・「中級講座」

2クラス・「上級講座」1クラスの5講座です。3カ月を1サイクルとして100名の受講者が学習しています。2時間の学習の間に、休憩10分を挟んでありますが、終了後は帰りたいがらない方もあります。年賀状の学習後は、自分の作品を投函してくる方もいるし、週一の学習が待ちどろしいようです。シニアの皆さんが、眼を輝かせて楽しそうにパソコンに向かってる姿は、とても頼もしく眩しいものがある。

「じんぶん館教室」では、講師やサポーターが40余名おります。「常に楽しく！」をモットーにイチヤリバチョウデー（行き逢えば）の雰囲気講座を進めています。

3カ月に1度の「ご苦労さん会」は、全員が集い、歌ったり踊ったり、ダベリングで時が経つのも忘れる程である。

時には「日帰りバスツアー」を計画したり、仲間の「生年祝」を開催したり、家族的な雰囲気で大きな輪と和を広げています。

パソコンは日進月歩ですからスキルは欠かせません。週1度の学習会は満席です。「IT」時代の波に乗って、「高齢化社会」に生きる私達は、常に成長している自分であることを目指しています。そして、知識の共有と相互研鑽に努めつつ「活力ある明るい社会」作りに努めている現在である。

フォトアルバムも作成

結びに、那覇市の「てんぶす館」室長 渡口真常の「目指せスーパーパーおばあちゃん（おじいちゃん）」の活動を報告します。

シニア世代のコンピュータライフのモチベーションとして大事なものは何だろう。地域の指導者として、あるいはオーガナイザーとして、コンピュータの文書作成機能を駆使した閲覧板や、通知文の作成、あるいは表計算ソフトを使った老人会や町内自治会の会計管理などをやることだろうか？。もちろん、コンピュータを使うことで、スマートで完璧なものを作ることができ、シニアがそれらのものを使いこなせば賞賛を浴びるだろう。

シニアとしては独自の価値観でコンピュータを駆使して、生活を豊かにすることこそが、本当に尊敬と敬意をもって迎えられないのではないだろうか。

NPO法人沖縄ハイサイネット、那覇教室に通う女性、名前を仮にYさんとしよう。彼女は写真撮影がデジカメで気軽にできるようになってから、家族の記録を撮影するようになり、撮りためた写真の管理をやりたくて、パソコンを始めた人だ。パソコンで写真の管理をやりたくて、目に入れても痛くない孫たちの成長の記録を今では、フォトムービーソフトを使い動画、静止画を織り交ぜて作成している。

忙しい親に代わって、行事ごとにDVDを制作し、今では、孫たちから「私のスーパーパーおばあちゃん」と呼ばれている。

あなたも、沖縄ハイサイネットのパソコン講座で、スーパーパーおばあちゃん、おじいちゃんを目指しませんか？

車椅子利用者でも会員ライフを満喫 —オンライン活動を主軸に展開—

1. メロウ倶楽部とは

メロウ倶楽部は「高齢者の積極的社会参加を情報化の支援によって促進し、豊かな活力に溢れた21世紀の長寿社会を目指す」をモットーに1999年に設立された「シニアのための、シニアによる団体（任意団体）」である。

「クルマいすの上でもフルに会員ライフが楽しめる」ようオンラインでの活動を主軸に、幹事会活動や事務処理に至るまで全てオンライン上で行っている一方、お互いに顔を合わせるオフライン活動も盛んである。

ネットコミュニティの運営に必須のICT環境についても開発・運用等のすべてを自前で行っており、会の運営予算も補助金等は一切受けずに会費収入等ですべて賄っているなど、完全に自立したコミュニティである。

現状の会員数は、約400名。会員は全国の40都道府県に散在。会員の平均年齢は、男性（会員

2. 運営の仕方は

数の59%）75歳、女性は70歳となっている。

メロウ倶楽部 ● 若宮正子

（1）「会議室（部屋）」と呼ばれる掲示板システムがコミュニティの基本的な交流基盤

倶楽部のサイトには、多種多様な会議室（いわゆる掲示板：ここでは部屋と称している）がある。

「写真系」「俳句等の文芸系」「植物園」「電脳音楽」等の趣味の部屋、「日常的なチャットの部屋」「生と老の部屋」「ICTに関する情報交換の部屋」等があるほか、会員相互の連絡に使われる部屋もある。当倶楽部では「会議室」の役割が非常に大きく、メロウ倶楽部をメロウ倶楽部たらしめているものは「会議室」であるといっても過言でない。

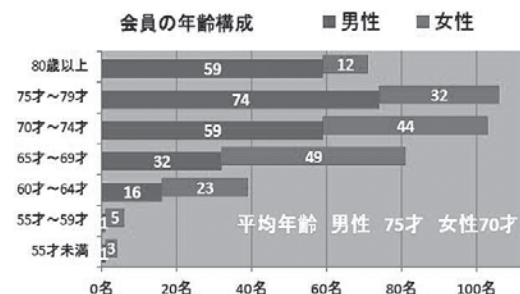
《当倶楽部の会議室の特色》
すべての部屋と称する会議室

会員の居住地分布

会員の居住地分布



会員の年齢別構成



には「語らい」がある。同好の士の集いである趣味の部屋も、単に「作品を公開する（非公開の部屋では会員同士で共有する）」場としてだけでなく、その作品についての「作者の思い」や「見た人の感想」「その他の関連事項」を語り合うことに重点が置かれている。

「オフ会」の部屋ですら「行き先についての情報交換の場」あり、終了後の世話役に対する「謝辞」などを述べる場ともなっている。

特徴的なのは、「生・老・病・死・介護」を語り合う部屋の存在である。ここでは会員同士がホッとして「よりよき生・死」について語り合っている。こうしてできた「友人関係」の絆は固く、地域の友人、時には親族よりもお互いの理解が深まることも多い。

なお、会議室の一部は公開の場に置かれ、非会員も読むことが出来るだけでなく投稿も可能となっている。

（2）オフライン・ミーティングも盛ん
大都市では、1カ月に一回程度のICT



全国オフ会「懇親会」での「伝言ゲーム」



シニア同士教えあう地域グループでのパソコン教室

IT関連の勉強会や、レクリエーションの集いを開催している。

病気・介護等で外出困難な会員や、近隣に会員の少ない地方在住の会員を除き多数の会員が各種のオフ会に参加している他、年一回の全国オフも行なっている。

(3) ICTの先端技術の活用

・ ネット環境のない場所での勉強会でのモバイルWi-Fiルータの活用（インターネット上で展開する団体であるため、勉強会には、ネット環境の存在が必須の要件となっている）。

・ Ustreamによる「勉強会の会員向け配信」「全国オフ会の懇親会の実況中継」等により、オフライン活動に参加できない会員をサポートする。

・ 「PC情報相談室」と名付けられた会議室で、会員の情報端末に関する「困った」にベテラン会員が親身の回答を寄せて助けている。

・ 多様化する情報端末（スマホなど）についての情報交換も活発に行っている。

3. 国際交流

韓国の子ニアネットである「KJクラブ」と、週一度のスカイプチャット、年一度の相互訪問等を通じて、継続的にオンライン・オフラインの両面で交流している。

4. 社会貢献

創立当初より「単なる仲良しクラブであってはいけない」との考えに基づいて「シニアに相応しいネットを通じた社会貢献」を模索、下記を中心に活動している。

メロウ伝承館

「平成シニアが後世に贈るプロジェクト」として、シニアの「戦前・戦中」

「戦後」の記録を後世に伝えることを目的としている。

このプロジェクトは2005年に国連情報社会世界サミット文化部門日本最優秀賞を受賞した。すでに、4千を超す投稿と1千を超える画像（データベース化）を収録。なかには近代史の資料として貴重なものも含まれている。

シニアからの「ICT行政」についての意見集約実際に情報機器を使いこなしているシニアから、使い勝手等への問題指摘や要望事項を発信することで、シニアにとってより使いやすい情報機器やソフトについての意見を集約するプロジェクト、たとえば「電子申告・電子政府を考える」「高齢者に使いやすいデジタルテレビを考える」「ネットサービスと高齢者」「携帯情報端末とシニア」等を取り上げた。

地域グループによる社会貢献活動

《九州グループの例》

毎年、あすばるフェスタ（福岡県男女共同企画センター主催）にメロウ倶楽部の九州グループが参加、「シニアの楽しい生き生きパソコン」と銘打ち、パソコン経験のないシニア等の一般の参加者へ名刺や写真入りカレンダーを作ってプレゼントするほか、無料パソコン相談などを行って、デジタル機器の楽しさを伝えている。

《千葉グループの例》

ここでも毎年、勝田駅構内の一角を借りて会員の作品による写真展を実施し地域の人達との交流を深めている。写真展でメロウ倶楽部を知って、会員になるシニアもいる。

今後の方向について

会員の高齢化が進みつつあり、会員相互の「ネット上でのささえ合い」の必要性が以前にも増して高まり、その分「社会貢献」へ注力する余裕が減少している。より若い会員の増強が強く望まれている。

観光を通じた東北の復興と 地域振興にむけて

—「東北観光博」で新しい観光スタイルの確立を目指す—



観光庁観光地域振興部観光地域振興課 東北観光博推進室 ● 小林弘典

滞在交流型の観光に転換

平成24年3月18日から、「ここをむすび、出会いをつくる」をテーマに、「東北観光博」がいよいよ本格実施となった（写真1）。東北観光博とは、東北全体を一種の博覧会場と見立て、東北の主要な観光地28箇所の「ゾーン」を核とし、東日本大震災以降落ち込んでいる東北への旅行需要の喚起を行う官民挙げた一大キャンペーンであり、平成25年3月31日までの実施となる。

東北観光博では、地域を活性化する新しい観光スタイルとして、従来の観光スポットを巡る観光だけでなく、地域が主体となってその歴史や文化、くらしなどを観光資源として活かし、地域の商店街や農漁村集落など、地域の「日常生活」に観光客が回遊する「滞在交流型の観光」への転換を図っており、地域と観光客の交流をより促進させる新しい観光スタイルの実現を目指している。

その一環として、観光客と地域の人々のつなが

りをつくるきっかけとして、「旅のサロン」や「旅の駅」が設置されている。

「旅のサロン」とは、各ゾーンに一箇所、そのゾーンの入口（例：鉄道駅構内等）となるとところに設置されている（写真2）。ここでは各種観光スポットの情報のほか、その土地ならではの体験が楽しめる観光客の評価の高い滞在プログラムが紹介される。また、「東北バスポート」（写真3）を無料で発行し、各ゾーンの個性あふれるスタンプを押印してもらえらる。東北バスポートを手に入れて各ゾーンの「旅のサロン」でオリジナルスタンプを集めると、嬉しいプレゼントが付与される。さらに、各ゾーンにある「東北バスポート加盟店」で提示すると、割引などお店ごとのサービスを受けられる。なお、同様の特典が受けられるスマートフォン版のデジタルバスポートも用意されている。

また「旅の駅」とは、既存の商店や施設などを活用し、ゾーン内の様々な場所に複数設置され、「観光への取組拠点」として、より詳細な地域の

観光情報の掘り起こし・発信を行いつつ、地域住民による観光客への「おもてなし」の場となる。

地域観光案内人でリピーター増

そして、「旅のサロン」「旅の駅」にそれぞれ配置されているのが、「地域観光案内人」と呼ばれる、地域のことに精通するとともに、地域の魅力、地域の好きなところを伝えることができる人々である。

これまでの観光案内は観光スポット等が中心で、いわば供給側の発想のものであった。これだと観光スポットや大規模観光施設等の回遊にとどまり、地域との関わりが浅く、地域や地域の人々とのふれあいが少ないことから、地域のファンになりリピーターになる観光客が少ないという課題があった。

これらの観光案内は、観光客の視点に立った観光案内として、観光スポットに加え、地域の個性や伝統文化に根ざし



写真1 オープニングセレモニーでのテープカットの様子

た地域の、日常空間を含めた回遊を促進させることを目的に、観光客のニーズに対応した地域のおもてなしを実現するための幅広い情報収集と発信を行いながら、観光客と地域の人々とのふれあいのシーンを作り出すことにより、地域のファンとなつてリピーターとなる観光客を増大させることが求められている。

地元の人々と観光客の接点に

このような考え方のもと、「地域観光案内人」は、観光客の「旅行前」「旅行中」「旅行後」の気持ちに対応した役割を果たすことが求められている。まずは「旅行前」に、観光客が「今度の休みに○○へ行くこう!」という気持ちになるためには、その地域ならではの情報を収集し発信することにより、観光客に地域に来ていただくための興味を

喚起させることが重要である。そのために「地域観光案内人」は、地域ならではの情報の魅力がしっかりと伝わるように発信することも重要で、また、ガイドブック等には掲載されていない、季節に応じた旬で地元でしか手に入らない情報を発信することは非常に効果的である。

次に「旅行中」に、観光客が「また○○に行きたい(会いたい)！」という気持ちになるためには、その地域ならではのオンリーワンの魅力やおもてなしを体感することにより、その地域のファンになり、また行きたい(会いたい)というリピーター行動につながるが重要である。そのために「地域観光案内人」は、観光客のニーズにあったご案内が必要となるわけだが、「話す」のではなく、まずは観光客の話しに「耳を傾ける」ことからはじめ、その上で、観光客のニーズにあった地域の魅力等を「伝える」ことを意識した案内

おもてなしの輪の拡大を

そして「旅行後」であるが、インターネットやソーシャルネットワークサービスの普及により、観光客の中には、それらを通じて「みんなに○○を教えたい!」という気持ちになって広く情報発信する人も少なくない。その観光客(だけ)が体験した、地域での感動や出会い等を多くの人に伝えたいということで発信されたものは「声(評価)」となり、それを見た第三者(特にこれから旅行に行こうとしている人)の視点として非常に重要である。「地域観光案内人」にとつては、観光客の「旅行前」「旅行中」に対する対応の結果(評価)といっても過言ではないので、高い評価のものには感謝の気持ちを伝え、また仮に苦情等のものは、観光客の期待の裏返しにとらえ、早急な対応と誠実な気持ちを伝えることにより、先ほどの「再来訪意向」のところで話した「今後、期待に応えてくれる」存在として認めてもらえるように対応することが極めて重要となる。

先述の通り、「こころをむすび、出会いをつくる」がテーマとなっているが、地域観光案内人のみならず、地域の方々が日常のなにげない暮らしの中から「おらがまち自慢」を見つけ出して、また訪れてくれた観光客も一緒にあって、それらを磨き、育てあげていくことを通じて、地域におもてなしの輪がどんどん広がっていくことが期待される。そしてこの東北観光博における取組みが、東北の復興の一助となり、東北の人々の手によって新しい観光スタイルが実現されるきっかけになることを期待している。



写真2 旅のサロンの様子 (仙台・秋保・作並ゾーン)



写真3 東北パスポート

をすることが重要である。また、何気ない地元の人々とのふれあいが、観光客にとってはその地域ならではの感動体験となることで、観光客のファン化・リピーターの増大につながることから、地元の人々と観光客の接点をつくるような案内も重要である。

街コンで地域も若者も元気に

自治体注目の大規模合コンとは？



株式会社電通 電通総研研究員

穴沢 秀朗

商店街が丸ごと合コン会場に

街コンとは、特定の街の飲食店数店舗で同時に行われる大規模な合コンイベントである。参加人数は少なくて100名前後、規模の大きいものになると2千名を超える街コンが開催されている。

発祥は2004年の栃木県宇都宮市で、客足の減少に悩む飲食店数店舗が街おこしイベントとして開始した。街コンは2011年後半から全国各地で急増し、今では毎週のように日本全国どこかの街で開催され盛り上がっている。

その名称は街の名前から一字拾った「宮コン」(宇都宮市)、「湯コン」(新潟市)、「神コン」(神戸市)などと呼ばれることが多い。その他では、韓国料理店が多く軒を連ねる東京・新大久保の「韓流コン」や学生限定の「ガクコン！」(東京・新宿)、街コンと共に音楽を楽しむことをウリ

にした「渋谷 楽コン」(東京・渋谷)、岩手県石巻市の牡蠣を料理に振舞う「石巻カキ×渋谷で街コン」(東京・渋谷)など、街の特徴やテーマの設定で名前が付けられることもある。

参加費は男性で一人6千円、女性で同4千円ほどのものが多く、受付で参加証代わりのリストバンドと店舗マップを受け取り、食べ放題、飲み放題で貸し切りにしてある飲食店間を移動して合コンを楽しむ。この街コンが今、新たな「出会いの場の創出」「地域おこし」のイベントとして各種メディアで注目されている。

街コンが解決に貢献する2つの問題

この地域密着型の大規模合コンイベントは、日本が抱える2つの社会問題の解決に寄与する可能性を秘めている。それは①「不況、消費の鈍化による飲食店の売り上げ減少と商店街の衰退」、②「未婚率の増加と

それに伴う少子化による人口の減少」である。

1回で数百～千人の人が集まる街コンは、飲食店の売り上げや商店街の活性化につながるだけでなく、初めて街を訪れる人への宣伝効果にもなる。また、街コンの開催時間帯は14時～18時の間で3時間ほどのものが多いが、これは普段飲食店にとってお客さんの少ない(売り上げの少ない)時間帯であり、この時間帯での売り上げの確保、さらに新規顧客の獲得にもつながる。

夕方までの開催なので、参加者同士で意気投合した場合はそのままお店に残って合コン二次会(もちろん別料金)を行えるなど店舗・参加者双方にとってメリットがある。

街コンが解決を後押しするもう一つの社会問題として、「未婚率の増加、少子化による人口の減少」が挙げられる。平成22年の国勢調査によると、25～29歳の男性の69.2%が、

女性では58.9%が未婚であるという結果が表れている。30～34歳でも、男性の46.0%が、女性の33.9%が未婚である。また、平均初婚年齢も年々上昇する傾向にあり、厚生労働省の「人口動態統計」によると、2010年時点で男性30.5歳、女性28.8歳が初婚年齢の平均であるということが示された。

言うまでもなく、こうした要因が少子化、そして人口減少につながっている。周囲に既婚者が少なければ、独身でいることに対する焦りもなく、「自分に合う人が見つからない」「無理に結婚する必要はない」という考え方を持つ若者が増えているのではないだろうか。

筆者は「異性との出会いが少ない」という学生時代の友人から飲み会(合コン)のセッティングを頼まれ幹事をする人が多い。しかし考えてみると、合コンで出会える異性の人数はせいぜい3、4人で、その後、交際・結婚とつながる可能性は低いのではないだろうか。これが街コンの場合どうだろうか。

制限時間内であれば、何人もの異性と出会うことができ、経済的にも時間的にも効率が非常に良いことが想像できるだろう。このように、飲食店・商店街の売り上げ向上だけで

Year	25~29歳男性 (%)	25~29歳女性 (%)	30~34歳男性 (%)	30~34歳女性 (%)
1975	48.3	20.9	14.3	7.7
1980	55.1	24.0	21.5	9.1
1985	60.4	30.6	28.1	10.4
1990	64.4	40.2	32.6	13.9
1995	66.9	48.0	37.3	19.7
2000	69.3	54.0	42.9	26.6
2005	71.4	59.0	47.1	32.0
2010	69.2	58.9	46.0	33.9

Year	Male (Age)	Female (Age)
1975	27.0	24.7
1980	27.8	25.2
1985	28.2	25.5
1990	28.4	25.9
1995	28.5	26.3
2000	28.8	27.0
2005	29.8	28.0
2006	30.0	28.2
2007	30.1	28.3
2008	30.2	28.5
2009	30.4	28.6
2010	30.5	28.8

り制」であることがあげられる。同じメンバーと2、3時間一緒に飲食をし、語り合う合コンや婚活パーティーと違い、自分に合わないと思ったら次の店舗に移

るようだ。この他、地方出身者の帰省のきっかけにもなっている。

今後は初めて街を訪れる若者にもう一度足を運んでもらえるよう、店舗だけでなく、地域全体の魅力を街コンを通じて伝え、地域ブランドングをしていくことが大切になってくるであろう。

長引く不況で、日本・地方に元気がなく、若者に活気がない。街コンが地方・若者双方の元氣を取り戻す起爆剤となる可能性は高いのではないだろうか。

きつかけの場だ。しかし参加者は、異性との出会い以外にも普段電車を通り過ぎている知らない街との出会いや、食べ歩きをすることでお気に入りのお店と出会うといったプラスアルファの楽しみ方がある。

動できる「ゆるい」システム、フラ
ンクに語り合うことができ、窮屈さ
を感じさせない雰囲気若者からのの
支持を集める理由であろう。

初の街コンとして行われた宇都宮市の「宮コン」は今年の5月で38回目を迎え、その人数は3千人、参加店舗数は48店舗と最大級の規模での開催となった。

街コンがこれほどまで活況を呈しているのはなぜだろう。それは街コンが持つ要素が現代の若者の恋愛価値観にマッチしているからではないだろうか。街コンは合コンである以上、男女の出会いの

素は、「異性との出会いが目的ではない」といった「出会いに飢えてゐるわけではない」という『言い訳』にもびつたりだ。

また、若者の気持ちにマッチした街コンの仕組みとして、「入れ替わ

大宮盆栽村の歴史と盆栽文化の発信

さいたま市大宮盆栽美術館の取り組み



さいたま市大宮盆栽美術館 主事（学芸員）

田口文哉

盆栽の聖地「大宮盆栽村」

OMIYA BONSAI——さいたま市北区に所在する大宮盆栽村（現「盆栽町」）を意味するこの語が、世界的な共通語として認識されていることをご存知だろうか。盆栽を仕立てている者ならば生涯に一度は訪れてみたい土地、盆栽村は言わば、世界中の盆栽愛好家にとっての聖地なのである。おりしもこの原稿を執筆している5月には、「大盆栽まつり」という盆栽村をフィールドとした大露天市が開催されており、29回目を迎える今回も、道を埋め尽くさんばかりの人が訪れている。

盆栽というと、お年寄りの趣味というイメージがいまだにつきまとうが、ここ数年来的状況からは、そうしたイメージを覆すような光景を見

ることができるといえる。盆栽村を訪れる人々には、いまや若い世代も多いれば、外国人観光客の姿も珍しくはない。「和のグリーンインテリア」として、日常生活の中で気軽に楽しめる盆栽ブームの幕開けのときが、いままさにやってきていると言っても過言ではないのだ。

こうした盆栽を取り巻くムーブメントの高まりのなかで、大宮盆栽村に根ざす盆栽文化を広く発信しようと、公営としては世界初の盆栽専門美術館として、さいたま市大宮盆栽美術館は平成22年3月に開館した。筆者は、当館で盆栽文化を研究し、展覧会事業や収蔵品管理を担当する学芸員として勤務している。本稿では、大宮盆栽村と、その立地を活かした当館の地域および文化振興の取り組みを中心に紹介したい。まずは

この一風変わった名称を持った大宮盆栽村の歴史を紹介しよう。

大宮盆栽村の歴史

盆栽村はかつて一面に草木が繁る、未開拓の土地であったそうだが、この地に盆栽村が開村する契機となるのは、大正12年（1923）に起きた関東大震災に起因するのである。震災前から都市化が進んでいた東京では、すでに環境の悪化が問題となっており、震災後に猛烈な勢いで進められた都市化の波が後押しするなかで、当時東京の駒込周辺で盆栽園を営んでいた数名の盆栽園主たちが中心となり、集団で当地を開拓、移住したのである。豊かな土壌と豊富な水、そして広い敷地を求めてのことであった。

ただし、主要な市場は東京にあったことから、盆栽村移住後も一定の時期までは東京での営業は続けられていた。そうした主要市場との往復の利便性のために、国鉄東北本線（現JR宇都宮線）

が盆栽村を通っていることも、当地が選ばれた理由の一つであった。大宮盆栽村とはつまり、盆栽園主自らの手により、盆栽育成と流通のために作られた、新しい村だったのである。

盆栽文化発信の拠点としての美術館

大宮盆栽村の開村から約90年、20軒近くの盆栽園が営業していた昭和



盆栽庭園の夏



小学校連携学習プログラム「盆栽職人の道具」



ご当地サイダー「大宮盆栽だー!!」

初年頃に比べると、現在営業しているのは7〜8園程度と減少傾向にあることはたしかである。しかし、一方で国際的な視野に立てば、新しい

世代の盆栽愛好家が増加していることも事実である。この魅力ある日本の伝統文化「盆栽」を、広く一般の方へ伝えるために、当館では大きく分けて3つの事業を展開している。すなわち、①

②普及事業、③サービスおよび連携事業である。ここでは、その中から代表的なものを紹介したい。

①展覧会事業では、盆栽の多様な魅力を紹介する盆栽展や、盆栽文化に関する企画展を開催してきた。NHK「趣味の園芸」前司会者としても著名な盆栽家、山田香織さんの個展や、若者に人気のある写真家大和田良さんの撮りおろしの盆栽写真展、また浮世絵版画に描かれた盆栽を特集した展覧会を開催し、盆栽愛好者だけではなく、美術ファンなど一般の方も含め、大きな反響を呼ぶことができた。

②普及事業では、当館の常勤盆栽師が講師を務めるワークショップを開催し、毎回多くの参加者を集めている。一例としては、家族で楽しむ盆栽講座や、一般の方と外国籍の方対象の盆栽ワークショップ、そして盆栽実技のデモンストレーションが挙げられる。また、近隣の小学校で毎年実施されている盆栽作りについて、言わばその後のアフターケアをするための「小中高生盆栽相談デー」など、地域との連携事業も開催している。

③サービス事業としては、美術館運営には必須とも言えるミュージアムカフェとして、当館の盆栽庭園を一望できるテラスに設置された「盆美カフェ」（土日祝のみ営業）や、当館所蔵盆栽をモチーフにしたオリジナル手ぬぐいなどを販売するミュージアムショップを設け、それぞれ売り上げも好調である。なかでもこれからの四季にオススメなのは、盆栽の松葉のチクチクとした印象を、強めの炭酸で表現したご当地サイダー「大宮盆栽だー!!」である。地域振興商品として開発され、近隣のコンビニエンスストア等でも購入することができる。また、本年から導入した音声ガイドシステムは、日本語のほか英語、中国語、韓国語、バリエーションもあるので、外国人観光客にも大変好評である。

他にも、さいたま市立小中学校との連携学習プログラムとして、児童生徒を対象とした盆栽鑑賞プログラムを実施している。また、地域の博物館や民間企業等と連携して地域ぐるみのイベントを開催する「ミュージアムビレッジ大宮公園」に参加するといった、当館単独の地域振興だけではなく、地域諸機関との連携に基づいた事業を展開している。

盆栽ブームがやってくる

地域に根付いた盆栽文化をアピールする取り組みにより、開館以来の来館者数は12万人を超え、盆栽村に営業を続ける盆栽園にも、一般の方々が数多く来園するようになったということがある。また、外国人来館者も世界64カ国（アメリカ、中国を筆頭）から、2500人を超える方を迎えている。最近では、NHKをはじめとするテレビ、新聞、雑誌等に取り上げられる機会も増えている。盆栽をとりまく大きなうねりが、盆栽のための村と美術館がつくられた、ここ大宮盆栽村を中心に動き出しつつある実感を覚える。このうねりを日本各地へ、そして世界へ波及するよう、今後も魅力ある事業の展開を図っていききたい。

世界の環境首都を目指した取組

く「北九州市環境未来都市」及び「グリーンアジア国際戦略総合特区」のダブル選定が持つ意味く

北九州市前成長戦略・企画担当理事

● 伊藤正志

公害のまちから環境のまちへ

昭和38年に門司・小倉・戸畑・八幡・若松の5市が合併して誕生した北九州市は、来年2月に市制50周年の節目を迎える。

この間、高度経済成長や公害の発生と克服、高齢化、そして人口減少など、我が国の歩みを象徴する数々の出来事を他都市に先駆けて体験した。また、アジアをはじめ海外とも、環境分野をメインに官民が協調した人的交流を積み重ねてきた。

現在では、北九州市が有する最大の資産である「市民」の力を活かしつつ、「世界の環境首都」を目指し、環境と経済の両立を目指した様々な取組を始めている。昨年末には、環境分野では全国で唯一、環境未来都市

市及び国際戦略総合特区に選ばれており、海外からも注目される最新の取組を見てみたい。

「環境未来都市」「国際戦略総合特区」とは？

「環境未来都市」を簡単に説明すると、「環境や超高齢化などをテーマとした様々な取組を進め、暮らしの質が向上し、誰もが住みたくなるショールームのようなまち」ということになる。

環境未来都市の英語名がFutureCityであることを考えれば（政府が設けた「環境未来都市」構想のサイト名もこれ）、エコだけでなく多様な分野で世界のモデルになることが目標と言える。昨年秋季に公募され、ヒアリングなどを経て、昨

年末に全国から11地域が選定された。北九州市もその一つである。

これに対し、主な目的を経済面につなげた施策が「国際戦略総合特区」である。わが国の経済成長のエンジンとなる地域を指定し、その取組を規制改革や税制上の特例などを通じてオーダーメイドで支援していくものだ。また「国と地方の協議会」を設け、地域のニーズに応じた措置を追加するなど、国と地方の協働プロジェクトとしての側面を持つ点も特徴である。

一方、政策課題の設定や解決策の提示、地域の責任ある関与などが求められるなど、指定までの道のりは



環境未来都市選定証授与式の様子

簡単ではない。環境未来都市とほぼ同時期に選考過程が始まり、北九州市・福岡県・福岡市が共同で申請した「グリーンアジア国際戦略総合特区」を含む全7地域が昨年末に選ばれた。

市民参加型の「スマートコミュニティ」

では、北九州市の特徴ある取組には、どのようなものがあるだろうか。

読者の皆さんも、最近「スマートグリッド」という言葉を聞かれたことがあると思う。これは、ICTを活用して電力供給を最適化するシステムのことである。

北九州市はこのシステムに関する実証実験の舞台となっており（スマートコミュニティ創造事業）、地域節電所やスマートメーターの導入により、電力の需要者である、家庭・ビル・工場などでエネルギーを賢く無駄なく使うマネジメントシステムの構築を目指している。

今春から、電力の需給状況に応じて電力料金を変動させるダイナミックプライシングという世界的にも注目される取組が一部で始まった。

さらには、このネットワークを高齢者の見守りやデマンドバスにも活

上下水道などの製品・技術・ノウハウを「パッケージ化」販売

続いて、海外水ビジネスに代表される都市環境インフラの「パッケージ化」による海外展開に注目したい。本市は以前から、多くの地域・分野で海外技術協力を行っており、例えば上下水道分野における専門家の

用する構想を持っており、単なる電力供給システムの枠を超えた意味を持つのが、「スマートコミュニティ」のゆえンである。



地域節電所



スマートメーター



水道の技術指導を行う職員（カンボジア）

海外派遣は13か国・143名、海外からの研修員受け入れは100カ国以上・約2千900名に上る実績を持つ。

加えて、地域をメッシュで分けてブロックごとに流量を確認する本市独自の技術により、例えばカンボジアのプノンペン市では漏水率が72%から8%まで劇的に改善するなど、各地で成果を上げてきた。

水以外にも、北九州市内には、廃棄物処理やエネルギーマネジメントなど、都市が持つ様々な環境インフラに関する技術や施設がある。

一つの地方自治体のエリアだけで、これだけの地域資源及び実績を有する街は全国でも例を見ず、都市環境インフラを一まとめにし、パッケージではなく、パッケージで



リサイクルにより分別されたレアメタル材料

街の仕組みを丸ごとアジアなどに輸出する取組を始めている。

**レアメタル「都市鉱山」を
目指して**

一般的には余り知られていないが、携帯電話やデジタルカメラなどは、法的には一般廃棄物という位置付けであり、自治体のエリアを越えた収集ができない。これらの機器の中にレアメタルが存在することを考えれば、現行制度を見直し、ある程度のロットが確保でき採算ベースにも乗りやすい広域的な収集体制を実現することが大変重要であると考え、国に規制改革を提案している。

さらに、太陽光パネルは、現時点で廃棄量が少ないこともあり、リサイクルの仕組みが構築されていない

ものの、いずれ課題になることは明らかであり、その研究会を立ち上げ、制度化の検討を行っている。

ダブル選定の本当の「意味」

約2年前から両方の制度に携わっている立場からは、本市がダブルで選定されたことは感慨深い。ただし、環境未来都市にしても、総合特区にしても、あくまで、まちづくりや経済活性化の手段の一つでしかない、ということ忘れてはならない。

このような競争に参加した場合には、選定されること自体が目的となり、選定後、手段としてしっかり活用することが疎かになる可能性があるからだ。特に、それぞれの制度の趣旨を考えれば、環境未来都市は市民の、総合特区は企業の理解が第一であり、今後も丁寧に説明していく必要がある。

その上で、今回のダブル選定を機に、市民の皆さんが地域づくりや健康づくりに参加し、あるいは地域の企業から規制改革の提案が積極的に出され、支援措置の活用が進んだ時こそが、北九州市にとって両方に選定された「意味」を本当に実感する時期なのではないだろうか。

「新たな住まい手」と「地域」のマッチング

— 空き家の物件化、田舎暮らし体験ツアーなど開催 —



やまなし二地域居住推進協議会 会長

● 佐藤彰啓

都市から地方への移住・交流は、人口減少社会における地域活性化策の柱として期待される。財団法人地域活性化センターでは、「移住・交流推進支援事業」として、地域団体もしくは市町村が自主的・主体的に実施する、都市住民などを受け入れる事業を支援している。

今回、平成23年度に同事業を活用したやまなし二地域居住推進協議会の取り組みを、同会長佐藤彰啓氏にご紹介いただいた。

(企画・コンサルタント業務課)

身延町は山梨県の南西部に位置し、町の中央を北から南に日本三大急流の一つである富士川が流れ、その富士川を挟んで急峻な山岳地帯が連なる自然あふれる町である。

町を南北にJR身延線と国道52号が、東西に国道300号が通っており、さらに、平成29年には、中部横断自動車道が開通し、町内に「身延IC」「身延山IC(仮称)」「中富IC(仮称・要望中)」が整備されることから、首都圏だけでなく、中京・関西圏からのアクセスも向上する。

また、日蓮宗総本山「身延山久遠寺」「下部温泉郷」「本栖湖」など観光資源にも富み、年間を通じて多くの観光客が訪れる町でもある。

一方で、少子高齢化・過疎化が進行しており、昭和50年には約2万7700人いた町民も、現在では約1万4700人、人口減少率は約48%、高齢化率も約38%となっている。

今後、四半世紀でさらに減少し、約8200人になるとの推測もある。こうした中で、中山間地域を中心に、空き家や耕作放棄地の増加と

ともに、地域コミュニティ機能の低下が大きな問題となってきた。身延町では、「空き家バンク」を開設(平成20年)するとともに、町ブログ「身延Life」を通じて町の魅力を発信している。また、地域のNP法人なども農業体験や特産品の加工・販売など地域資源を活かした様々な活動を行い、新たな交流を生み出している。

交流拡大と定住促進

やまなし二地域居住推進協議会では、こうした地域の活動を支援するため、地域活性化センターの平成23年度「移住・交流推進支援事業」助成金を受け、「新たな住まい手と地域のマッチング事業」を実施した。

この事業では、①地域のニーズと状況の把握・発信、②地域の受入体制の整備、③空き家の物件化、④田

舎暮らし体験ツアーの開催、⑤みのぶ暮らしセミナーの開催、⑥ホームページの開設など、都市住民と空き家のマッチングを通じた定住の促進、体験ツアーを通じた交流の拡大を図った。事業の具体的な内容を次に紹介する。

①地域のニーズと状況把握

本事業は、地域が必要とする人材「新たな住まい手」を都市部から呼び込むことを目的としている。そこで、まず、ワークショップを通じて、地域の抱える問題とその解決策、必要な人材、地域の魅力や「強み」と「弱み」を見える化した。

新たな住まい手としては、集落の行事(区会、伝統行事、集落道の草刈りや道づくり)に積極的に参加でき、消防団に入団でき、かつ活性化を促進することに意欲のある者が求められた。世代的には、子育て中の若い世代が望ましいものの、元気なシルバー世代で農業に興味のある者であれば歓迎することとなった。

②地域の受入体制の整備

新たな住まい手が地域に根をおろせるよう、地域全体で支えていくことが必要となる。そこで、空き家や農地を提供するだけでなく、生活相談や農業の指導、地域文化の伝承など受入の体制を整備した。

■移住・交流による地域活性化支援事業の概要

【事業概要】

地方が都市住民等を受け入れる移住や交流人口の増加等につながる地域交流の推進により、地域を活性化することを目的として、市町村等または地域団体が実施する移住・交流を推進する事業に対し支援する。

【助成対象団体】

市町村（特別区を含む）、広域連合、一部事務組合等

【助成金額・助成率】

助成金額は、1件につき200万円が上限
助成率は、助成対象経費の100%以内

【交付団体】

平成23年度 42団体
平成24年度 51団体（予定）

【問い合わせ】

企画・コンサルタント業務課
電話番号 03-5202-6133



特産である曙大豆の収穫体験

は、売却・賃貸の意向の有無を確認した。その後、意向のあった空き家18棟の内部の状況や傷み具合など一級建

③空き家の物件化
新たな住まい手の住居として、空き家を活用するため、地域内の空き家の物件化を図った。まず、地域住民からの聴き取りにより、198棟の空き家をリストアップした。
次に、空き家の状態を調査（外観視認）するとともに、表札や聞き込みにより所有者を確認し、所有者が判明した空き家112棟について

④田舎暮らし体験ツアーの開催
身延での田舎暮らしの魅力（みのお暮らし）を体感していただくため、体験ツアーを実施した。
実施にあたっては、将来的に継続できること、地域住民との交流が図れること、身延町ならではの「が体感できることを考慮し、企画・調整をファームツーリズムを手がけるNPO法人に、体験の提供を受入支援団体に、昼食は地元のお母さん達にそれぞれ担っていただいた。



寒仕込み味噌造りの体験



物件化した空き家の見学

⑤みのお暮らしセミナーの開催
みのお暮らしの魅力を伝えるとともに、地域の現状や新たな住まい手の条件などを説明するセミナーを都内で開催した。町職員によるセミ

築士とともに調査し、物件化した。
最終的に、12棟が身延町空き家バンクを通じ、順次新たな住まい手に提供され、6棟については、今後2年間で町が改修したうえで「農地付ラウベ（簡易宿泊施設）」として、新たな住まい手に提供される予定である。

ツアーは、7月・10月・2月と季節ごとに3回実施し、農作業を中心に、季節に応じた体験を組み込むことで、季節ごとの楽しみ方や味わい、気候を感じていただいた。また、地域の新米移住者にも協力いただき、参加者と一緒に農作業を体験していただいた。

ナーのほか、受入支援グループによるセミナー、一級建築士による空き家の状態とリフォームについてのセミナーを行った。想定を上回る54名にご来場いただいた。
来場者アンケートでは、身延町が「田舎暮らしの候補地の一つになった」が33%、「現地を確認してみたくなった」が37%となり、効果を実感することができた。

⑥ホームページの開設

町内の交流・体験イベントなどローカルな情報や田舎暮らし実践者・支援グループの声を発信するサイトを地域NPOのホームページ内に開設した。今後、NPOの協力の下、内容の充実化を図っていく。

今後の展開

今回の事業では、交流の拡大や定住の促進を進める上での、第一歩として一定の成果を得ることができた。

今後は、物件化した空き家と「新たな住まい手」、地域のマッチングを図るとともに、町主催の空き家見学会に地域団体の農業体験を組み合わせた体験会や当協議会が開催する「甲斐適生活相談会」の中での「みのお暮らしセミナー」として継続して実施していく予定である。

歴史的景観とシニア住民の もてなしを活用した地域活性化 ～安心して老いていける地域社会の実現～

高取町は、大和平野の東南端に位置し、東は高取山、南走して菅原峠、船倉弁天山の連峰をもって吉野郡大淀町に接し、西は曾我川の清流を境として御所市に接し、北は貝吹山を境として明日香村・橿原市に隣接する。

高取町や隣に位置する明日香村など、古墳時代から飛鳥時代の遺跡が多く残るこの辺りは、まさに古代史

のふるさとである。高取の位置する高市郡もかつては今来郡（イマキコホリ）と呼ばれ、大和地方の中でも特に今来人（古代の渡来人）たちが大陸からもたらした新しい文化の栄えたところであった。また数々の歌人たちが和歌に詠み、親しんだ桜の

里・吉野もこの町のすぐ南側に続いている。

今回は、日本一の山城「高取城」の城下町である高取土佐街なみ周辺に賑わいを取り戻し、まだ残っている城下町の景観を保全し、次代に伝承していく事でまちづくりを進めている「天の川実行委員会」（以下「実行委員会」という。）を訪れ、野村幸治代表にお話をうかがった。

設立の経緯

野村幸治代表によると「出来るだけ長く元気で暮らし続けるための生きがいづくり」、「心身が弱っても住み慣れたところで暮し続けられる環境整備」、「お互いに支え合う人と人のつながりづくり」などが地域の課題であるという。現在の高取町は、60歳以上が40%と高齢化が進む中、

地域商店の廃業が相次ぎ高齢者の買い物難民化や、利用者減に伴う公共交通機関の運行本数減により高齢者の足が失われる危機に瀕している。

また、若者の流出による高齢単独世帯化が進み地域の活気が失われ、近隣関係も希薄化している。人口増が見込めない状況を踏まえ、観光客を呼び込むことで地域商店の廃業を防ぎ、公共交通機関の運行本数減を防止できると考えている。そこで、シ

ニア住民のもてなし力と土佐街道沿いの歴史的景観を活用して季節ごとにイベントを開催し、観光客を呼び込み地域の活性化を図ることを目的に実行委員会が設立された。「役場に頼らない自立する住民へ」を取組の基本理念とし、役場に何かを求めろるまえに、住民一人ひとりが地域に何が出来るのかを考え実践する。

そして役場は、所有する施設面や各分野の職員のノウハウで全面的に活動を支援することで住民と行政が協働してまちづくりに取組んでいる。

旧城下町の景観保全啓発活動

奈良県では、地域の住民や事業者が、景観づくりのために、一定の区域の建物の色彩や形態などの外観や、緑化など景観づくりに関する自

★ 団体プロフィール ★

設立年＝平成18年1月
設立・運営主体＝自主的組織
代表者＝野村 幸治
会員数＝10名
＜連絡先＞
〒635-0154
奈良県高市郡高取町観覧寺990-1
高取町役場企画財政課内



天の川実行委員会代表 野村幸治氏



町並みフラワーガーデン



町並み菜の花回廊



土佐町並み町家の雛めぐり

日本一の山城「高取城」の城下町として栄えた高取町。昔からの町家が、多く現存し、その当時の佇まいを残している。「土佐町並み町家の雛めぐり」は、土佐街道の町並みの佇まいを、ひとつのテーマパークに見立てて開催している。平成19年から始まったこの「土佐町並み町家の雛めぐり」は、平成23年度で6回目となっている。

町あげてのイベントに発展し、平成23年度は、雛人形を約百軒の民家の玄関や、縁側、店先など、現在実際に生活している家に展示しており、訪れた観光客などに公開し、雛人形を介して住民と観光客の交流が楽しめるイベントとなったという。ボランティアの参加者からは、「観光客とのおしゃべりが楽しい」などの感想がでており、今後も継続して開催されることが期待される。

編集委員 ● 松井宏晃

1 主的なルールを定め、住民でそれを守り、取り組んでいくための協定を締結した場合に「奈良県景観住民協定」として知事が認定を行う制度があり、平成23年8月23日に旧城下町周辺（土佐街道周辺）の7自治会で「土佐街道周辺景観住民協定」を締結し、同年10月17日に奈良県知事より「奈良県景観住民協定」の認定を受けた。

様々な活動を展開

2 四季折々のイベント開催
「町家の雛めぐりイベント」（例年3月の1か月間）
創出（例年3月の1か月間）
町並み沿いに菜の花の咲いたプラントーを住民協力のもと各家の軒下に置き、各地区自治会の住民が菜の花の水やりなどを担当して、町並み一帯を菜の花回廊にしている。
また町並み沿いの3千平方メートルの休耕田を活用して菜の花を育てフラワーガーデンを開設することで観光客を呼び込み、観光客は勿論のこと町の住民の心と身体をも癒している。

将来の展望

以上のイベントのほかにも実行委員会では様々な活動に取り組んでおり、住民の協力を得た活動が、高取町を訪れる観光客の増加に繋がっている。しかしながら、イベントを開催するにあたり、駐車場、食事処、土産物店などの不足が課題として残っている。今後は、行政とも協力しながら当初の観光客増加という目標に加え、新たに課題となったハード面での課題にも取り組んでいかないとはいけないとしている。実行委員会では、この課題は容易に克服できないと思うが、さらに町の住民と協力し取り組んでいきたいとしており、今後の活動に注目していきたい。

市区町村パンフレット ベスト30出揃う！

〜大河ドラマ、スカイツリー、北海道、世界遺産が人気〜

●年間29万部提供で順調に推移

地域活性化センターでは、平成23年4月から東京・日本橋プラザビル1階に「ふるさと情報コーナー」を設置し、都道府県・市区町村の観光・イベント等のパンフレット約2600種類を展示している。来訪者には、パンフレットをご自由にお持ち帰りいただいております。観光の下調べなどに活用していただいている。

この度オープンから1年目を迎え、平成23年度に提供したパンフレットについて調査を行った。その結果、年間の総提供数は29万164部となり、土・日・祝日も利用ができるようになった平成23年6月以降からは、徐々に提供数を伸ばしている。

●市区町村パンフレット ベスト30
今回の調査ではパンフレットに着目し、年間を通して展示された市区町村パンフレットの種類ごとに提供数をまとめ、人気のパンフレット30位までを別表の通り公表した。また、

その特徴は以下のとおりである。

1、トップの神戸市は3種類入っており、すべてNHK大河ドラマ「平清盛」関係のパンフレットがランキンした。

2、東京都台東区のパンフレットも2種類入っている。東京スカイツリー（墨田区）の開業効果で、周辺地域へも足を延ばす観光客が増えているようだ。

その他に、石川県金沢市、三重県伊勢市、京都府京都市が2種類入っている。

3、北海道内は、5種類がランキンしており、いずれも観光地である。

4、岩手県一関市は、世界遺産の平泉との広域観光パンフレットで11位に入った。

5、静岡県の伊豆半島に位置する河津町のパンフ

レットは、A4カラー裏表1枚の伊豆半島全体地図と同町の観光スポット（河津桜や旧天城トンネル等）がレイアウトされており、見やすく、コンパクトで便利な作りである。

●自治体のパンフは無料で展示
東京都心において、自治体がパン



ベスト30入りした人気パンフレット



パンフレットを手にする人達

フレットを展示できる場所は意外に少なく、展示できたとしても費用が発生することもある。自治体会員の皆様には、無料で展示できる当コーナーを活用していただき、首都圏住民に地域の魅力を伝え、地元へ足を運んでもらうためのきっかけづくりに、ぜひ役立てていただきたい。

23年度 ふるさと情報コーナー パンフレット提供数

※年間通して展示するパンフレットのみ季刊、月刊は含まず（単位：部）

順位	県	市区町村名	パンフレット名	提供数
1	兵庫県	神戸市	KOBE de 清盛 2012	668
2	石川県	金沢市	金沢市観光マップ	602
3	北海道	札幌市	さっぽろ観光マップ	545
4	東京都	台東区	台東区観光パンフレット（浅草・浅草橋）	539
5	兵庫県	神戸市	神戸・清盛隊と行く KOBE	508
6	東京都	台東区	台東区観光パンフレット（上野・谷中）	505
7	神奈川県	箱根町	箱根観光ガイド	490
8	三重県	伊勢市	ええじゃないかお伊勢さん	480
9	京都府	京都市	京都再発見	430
10	北海道	美瑛町	北海道・美瑛	407
11	岩手県	一関市	一関・平泉周遊MAP（リーフレット）	400
12	静岡県	河津町	河津町観光案内図ロードマップ	396
13	神奈川県	鎌倉市	鎌倉観光パンフレット	384
14	北海道	小樽市	おたる 小樽観光ガイド 2011	379
15	東京都	中央区	粋活中央区観光ガイドマップ（日本語版）	376
16	北海道	函館市	浪漫函館 2011	370
17	北海道	旭川市	あさひかわ 旭川ガイドマップ	369
18	東京都	北区	北区観光ガイドマップ（ダイジェスト）	368
19	静岡県	熱海市	湯めまちをどり「華の舞」	363
20	山口県	山口市	西の京 やまぐち	355
21	宮城県	気仙沼市	気仙沼ガイドマップ	350
22	神奈川県	湯河原町	ゆがわら散策マップ	348
22	山梨県	甲府市	昇仙峡マップ	348
22	京都府	京都市	古都探訪	348
25	茨城県	水戸市	水戸市 観光マップ	343
25	三重県	伊勢市	あっちゃこっちゃ伊勢志摩	343
27	石川県	金沢市	金沢市観光ガイドブック	341
28	山口県	萩市	萩を歩く	320
29	兵庫県	神戸市	「神戸DE清盛」1 dayパス	319
30	愛知県	名古屋市	名古屋観光ルートバス メーグル	318

ふるさと情報コーナー

（所在地）東京都中央区日本橋2-3-4日本橋プラザビル1階

（運営時間）10時～18時 休み：元旦

（問合せ）地域活性化センター 地域づくり情報課

（電話）03-5202-6138



鹿屋市長 ● 嶋田芳博

「ばらを活かしたまちづくり」による「元気なかのや」を目指して

鹿児島県鹿屋市は、九州南東部、大隅半島のほぼ中央部に位置し、面積は448・33平方キロメートル、人口10万人を擁する、大隅半島の交通・産業・経済・文化の中核を担う都市です。豊かな自然と温暖な気候に恵まれ、農業・畜産業・漁業といった第一次産業が盛んで、特に黒牛、黒豚、鶏、さつまいも、お茶、カンパチ、うなぎ等が主な特産品です。

戦時中は海軍の航空基地が置かれ、日本で最も多くの特攻隊員が出撃した本土防衛の最前線基地としての役割を果たした場所であり、現在では、海上自衛隊の鹿屋航空基地が配置され、日本の南西海域の安全保障に大きく貢献しています。

また、全国で唯一の国立体育系単科大学として、昭和56年に開学した鹿屋体育大学は、水泳でオリンピックの金メダリストが誕生するなど、柔道・剣道をはじめ、陸上・自転車・バレーボールなどにおいても世界トップレベルの選手を輩出しています。

今年、開催されるロンドンオリンピックにおきましても、自転車トラック競技の女子スプリントで4学年在学中の前田佳代乃さんが日本代表として選出され、その活躍が大いに期待されるところです。

さて、鹿屋市は「ばら」を市花とし、市民と一体となつて「ばらを活かしたまちづくり」に取り組んでいます。

これは「ばらで創る大隅地域の元気」を基本コンセプトに策定した「ばらを活かしたまちづくり計画」に基づき実施しているもので、本市の観光交流の拠点施設として整備した敷地面積約8畝、株数約5万株の日本最大規模のばら園である「かのやばら園」を中心に、交流人口の拡大による地域経済活性化を目指し、様々な事業を展開しています。

具体的には、まず「ばらいっぱいまちづくり支援事業」としまして、市内の企業や町内会・学校等により、市内各所にばらを植樹し、市民が身近にばらと触れ合う環境づくりのサポートを行っています。

これにより、最近では市民の間にも「ばらのましかのや」のイメージが定着し、多くの一般家庭でもばらを植栽する光景が見られるようになってまいりました。また「企業化サポート事業」として、毎年「ばらグッズコンテスト」と称した、ばらにちなんだ特産品開発を目的としたコンテストを開催し、入賞作品はばら園内の売店で販売しており、来園者に好評を博しています。

「商品開発事業」では、官民が連携した地元発の商品開発に取り組み、「ばらの焼酎」「薔薇カレール」など、「ばらのましかのや」ならではの、特色ある商品が誕生しています。このほかにも、ばらの栽培教室の開催やばら祭りボランティアの講習会などを実施し、ばらに関わる人材育成にも力を入れています。

こうした活動の中心にある「かのやばら園」は、「ばらのましかのや」のシンボルであり、年間約12万人が訪れる観光施設へと成長してきました。

また、今春は、イギリスに本社をおく「デビッド・オースチン・ローズ株式会社」より、同社が作出した「イングリッシュローズ」の苗木約9千本の寄贈をいただき、園内に日本最大規模のイングリッシュローズガーデンを整備し、リニューアルオープンいたしました。

ガーデンのデザインは、鹿屋市にゆかりの深いイギリス人園芸家に依頼し、これまでの「かのやばら園」とは一味違う、新たな魅力として全国にPRしているところです。さらに、今年度は、「かのやばら園の再生による元気なかのやづくり会議」を立ち上げ、市民の皆さんの意見を取り入れ、「かのやばら園」のさらなる充実を図っていく体制を整えようとしています。

今後とも、この「かのやばら園」の魅力を全国に発信し、「ばらを活かしたまちづくり」による「元気なかのや」を目指し、地域活性化をさらに推進してまいります。

皆様、鹿児島にお越しの際には、ぜひ、鹿屋市へ足をお運び下さい。もう一つの鹿児島がここにあります。

津軽平野のど真ん中に位置し、作家太宰治の生家「斜陽館」、中世安藤氏の十三湊遺跡群、ボルテージが一気にあがる夏祭り「五所川原立佞武多（たちねぶた）」といった歴史と文化を擁し、農林水産業を基幹産業とする豊かな自然に恵まれた田舎町。これが「五所川原市」です。

毎年8月4日から8日の5日間で開催されている「五所川原立佞武多」は、発見された一枚の設計図を元に、平成8年に有志の力によって復活したお祭りで、今年の開催は15回目を数えます。高さ23m、重さ19tの巨大立佞武多が練り歩く街の姿は、まさにミュージアム。ぜひ一度、お祭りを体感してください。

このほか特産品として「十三湖のシジミ」が有名です。十三湖は津軽平野を縦断する岩木川の淡水と日本海の海水とが混じり合う汽水湖で、夏場は「土用シジミ」、冬場は「寒シジミ」として人気を得ております。

このように素材たっぷり、魅力満載の五所川原は、まさにディープ！ぜひ一度、五所川原にお越しください。そして五所川原ファンになってください。



津軽のディープタウン 五所川原

■平成24年の新作は「復興祈願・鹿嶋大明神と地震鯨」。東日本大震災からの一日も早い復興と、この大震災を風化させず教訓として活かしたいという願いを込めて作られた作品。



■十三湖は津軽平野を縦断する岩木川の淡水と日本海の海水が混じり合う汽水湖。



■滋養たっぷり「十三湖産ヤマトシジミ」



■「立佞武多の館」隣の生鮮市場で提供している「ヤッテマレセット!」。お好みの食材をごはんの上ののせて自分だけのオリジナル丼を完成させてはいかが！



■「日本のさくら名所100選」に選ばれた芦野公園の約2,200本の桜はGWのまつり期間に見ごろとなり、たくさんの人でにぎわいます。



■吹き荒れる地吹雪にも負けずに走る"ストーブ列車"



■車内に入れば石炭ストーブの暖かさが旅人の冷えた体を迎えてくれます。

平成24年度地域再生実践塾開催のお知らせ

地域再生の方法について、さまざまな視点から考えるワークショップ「地域再生実践塾」を全国5カ所で開催します。

◆開催内容

第1回 鹿児島県鹿児島市「中心商店街活性化への取組」

開催日：7月4日(水)～6日(金)

会場：宝山ホール(鹿児島県文化センター)

第2回 愛知県豊田市「"共働"によるまちづくり」

開催日：9月5日(水)～7日(金)

会場：豊田産業文化センター

第3回 山形県鶴岡市「食と農～在来作物の存在と意義を見つめ直す～」

開催日：10月24日(水)～26日(金)

会場：東北公益文科大学大学院 鶴岡キャンパス 大学院ホール

第4回 岡山県備前市「エネルギー供給源の多様化による地域振興」

開催日：10月31日(水)～11月2日(金)

会場：リフレセンターびぜん 会議室

第5回 東京都墨田区「ものづくりと観光の融合による地域活性化」

開催日：11月12日(月)～14日(水)

会場：すみだ産業会館

◆対象 地方公共団体、商工会、商工会議所、NPOなど、地域再生に取り組んでいる人

◆募集人数 各回40名(会場などにより変動あり)

◆参加費用 無料(開催地までの往復の交通費、宿泊費、飲食代などは参加者負担)

◆申込方法 申込書を当センターまで送付してください。

申込書の様式は当センターのホームページからダウンロードできます。

*詳しくは、当センターのホームページをご覧ください。

【問い合わせ先】地域支援課 TEL 03-5202-6137

センター
通信



FWの様子(愛媛県松山市)



講義の様子(沖縄県那覇市)

被災市町村地域コミュニティ再生支援事業 募集のお知らせ

東日本大震災や原発事故により離散した集落の地域住民同士の絆の維持を目的とする事業に対して助成を行っています。下記のとおり対象事業の募集を開始しましたのでご活用ください。

記

■助成対象 岩手県、宮城県、福島県内の市町村のうち、東日本大震災に対処するための特別の財政援助及び助成に関する法律により、「特定被災地方公共団体」として政令に定められた市町村

■対象事業 対象市町村または市町村が助成する地域団体等が実施する、離散した集落の住民同士の絆の維持を図ることを目的とした事業

■助成金額 1市町村 1,000千円上限

■申請方法 市町村から当センターへ所定の申請書を提出してください

■申請締切 平成24年6月29日(金) 必着

*詳しくは、当センターホームページをご覧ください。

【問い合わせ】企画・コンサルタント業務課 TEL(直通) 03-5202-6133

地域づくり団体活動支援事業のお知らせ

地域づくり団体全国協議会では、地域づくり団体の活動を応援する助成事業「地域づくり団体活動支援事業」を行っています。

都道府県協議会及び地域づくり団体が行う研修会、講習会等への講師招へいに要する経費に対して助成します。

謝金及び旅費各10万円、計20万円が上限です。

助成の申請は、研修会等の開催2カ月前まで随時受け付けています。

申請手続きなどについては、地域づくり団体全国協議会のホームページをご覧ください。お住まいの地域の「地域づくり団体都道府県協議会」にお尋ねください。

(ホームページURL)

<http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp/dantai/dantai.htm>



平成23年度の研修会の様子

★日本橋プラザビルイベントスペース

6月

- 6月12日(火)～13日(水)
飛騨市特産会(岐阜県)
『「まるごと飛騨 ホットな贈り物」飛騨市観光と物産展』
- 6月18日(月)～19日(火)
豊川市観光協会(愛知県)
『豊川市観光物産展』
- 6月20日(水)～21日(木)
大地の芸術祭実行委員会・水と土の芸術祭実行委員会(新潟県)
『越後妻有と新潟市の芸術祭を楽しもう!』
- 6月25日(月)
東根市(果樹王国ひがしね観光物産推進協議会)(山形県)
『第12回中央区さくらんぼ祭』
- 6月28日(木)～29日(金)
沖縄県北部広域市町村圏事務組合(沖縄県)
『沖縄の地より!～やんばるの恵みを皆様へ～』

7月

- 7月2日(月)～3日(火)
珠洲市物産協会(石川県)
『能登半島・珠洲 観光物産展』
- 7月9日(月)～10日(火)
小菅村(山梨県)
『よってがっせえ小菅村(仮称)』
- 7月12日(木)～13日(金)
久留米市(福岡県)
『ふるさと・久留米市の紹介!』
- 7月17日(火)～18(水)
華やいで大阪・南泉州観光キャンペーン推進協議会(大阪府)
『とことん南泉州観光キャンペーンキャラバン in 東京日本橋』
- 7月19日(木)～20日(金)
ブランドすかがわ推進協議会(福島県)
『がんばろう須賀川! 物産市』
- 7月24日(火)～25日(水)
山梨県
『富士の国やまなしマルシェ』



(写真)
1 4月17日 藤岡市観光物産キャンペーン(群馬県)
2 4月24日～25日 富士の麓の観光物産展・富士宮(静岡県)
3 4月26日～27日 越前のおの名水楽座(福井県)

【編集後記】

▼世界に冠たる長寿大国・日本で、元気なお年寄りがパソコンやインターネットを活用し、豊かな日常生活を送っている話を耳にします。筆者のご近所にも、卒寿を超えて孫からのメールを自宅のPCで読んだり、PC画面で将棋や囲碁を楽しんだりする高齢者がいます。しかし、これらはほんの序の口のようなものです。

▼6月号は特集で、PC教室で学び、IT機器を使いこなす元気なシニアパワーを紹介しました。弊誌では、これまでに高齢者支援のためのICT活用に焦点を当てたことはありますが、今回は高齢者自身がICTを駆使して、生活をエンジョイしている事例に注目しました。

▼基調論文を執筆いただいた「老テク研究会」の近藤則子事務局長によると、インターネットやパソコン学習を支援する取り組みであるシニアネット活動は約25年前、米国で始まったそうです。米国のギャレット博士が力説した「パソコンを活用できるようになれば、高齢者は定年で一度は失った仕事や人間関係、つまり人生を取り戻せる」との呼びかけは、シニア世代にとって強い動機づけになりました。

▼事例紹介でも、お元気で多忙なお年寄りが多いのに驚きます。仮設住宅のパソコンで被災者支援を行ったり、iPadを携え東京の下町を散策したりと、その活動内容はさまざま。とりわけ高齢者がPCを楽しむだけではなく、地域貢献活動にも積極的に取り組んでおられる姿には、敬服するばかりです。

(原田)

7月号予告

特集II「地域で取り組む節電対策」(飯)

地域づくり6月号

2012年6月1日発行 編集・発行=財団法人地域活性化センター

東京都中央区日本橋2-3-4 日本橋プラザビル13階 電話03-5202-6131(代) <http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp/> 印刷・製本/株式会社丸井文工社

法律で許可された場合以外に、本誌からの無断転載を禁止します

落丁・乱丁はお取り替えします。地域づくり情報課(03-5202-6138)まで、ご連絡下さい。

宝くじは、 地方自治体の公共事業等に 幅広く使われています。

ワクワク、
ドキドキ。



宝くじの収益金は、
病院や検診車、図書館や動物園、
災害に強い街づくり、
緑あふれる公園、美術館など、
皆様の暮らしに役立てられています。